

電

今年度から報告書をDX化して
電子版を配信することに
しました。

令和7年度

「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書



山口大学教育学部



「ちゃぶ台プログラム」を通した学び

山口大学教育学部で平成17年度に発足した教職研修プログラム「ちゃぶ台プログラム」は、今年で20年目の節目を迎えました。「教職に前向きに取り組む学生や『やってみたいこと』を持つ学生に、挑戦の場、そして失敗してもよい場を提供すべきではないか」という課題意識のもと歩んできた本プログラムは、これまで多くの学生、教職員、教育関係者の皆様にご参加いただき、「ちゃぶ台」を囲んだ数多くの学びを積み重ねてまいりました。

「ちゃぶ台」のような円卓を囲み、上座・下座のない対等な立場で互いの思いを語り合う協働的なスタイルは、今や全国的に展開されています。これは、学生や大学教員のみならず、地域の学校関係者など多様な立場の方々が共に語り、学びを深める「ちゃぶ台スタイル」が評価され、支持されている証と言えるでしょう。プログラムを通じて得た成功・失敗の体験を振り返り、教職への悩みや不安を共有・協働して解決の糸口を見出すプロセスは、教員養成において欠かせないものです。また、こうしたプロセスを経験することは、入職後の「学び方」を学び、諸課題を解決する手法を習得する意味でも、学生にとって極めて重要な取り組みであると考えます。その成果は、教員採用試験の結果のみならず、地域の学校教育関係者の皆様から寄せられる声にも、その意義が如実に表れています。

正課外活動である本プログラムは、学生が自主的に参加し主体的に学びを進める「アクティブラーニング」の形式をとっています。教員養成の観点からも、学校現場での体験や関係者との対話は非常に貴重な機会です。さらに、現職教員を中心に学生・院生も交え、多様な視点から知見を得る「ちゃぶ台次世代コーホート」などは、教員研修の側面からも大きな意義を有しています。こうした活動を今日まで継続できましたのは、地域の学校関係者をはじめとする多くの皆様の支えとご協力があったからこそと、深く感謝しております。

今年度はいくつかの新規プログラムが始動し、学生・院生自らが新たな学びを創り出す機運が高まりました。こうした意識の変化や活動の進化も、地域の方々の支えがあつてのものであります。コロナ禍を乗り越え、「ちゃぶ台」の精神を継承しつつ新たな価値を創り出そうと奮闘したこの1年間の成果を、ここに「令和7年度ちゃぶ台プログラム活動報告書」としてお届けいたします。本報告書は、各プログラムの概要を紹介しながら、教員養成・研修の実際と私たちの想いを、学内外の皆様へ分かりやすくお伝えできるよう編集いたしました。

一方で、本プログラムを通じて学生が教員としての資質・能力を具体的にどう身につけているかという点については、未だ課題も多いと考えております。本冊子をご高覧いただき、ぜひ忌憚のないご意見やご提案を賜れば幸いです。

最後になりますが、私たちの取り組みに対し、山口県教育委員会をはじめ各市町教育委員会、教育学部同窓会、関係各位から多大なるご支援・ご鞭撻をいただいておりますことに、改めて深く感謝申し上げます。

令和8年3月

山口大学教育学部長 中 田 充

目次

あいさつ

I 「ちゃぶ台方式」教職研修部事業の概要	
1 「ちゃぶ台方式」教職研修の理念と目的	1
2 「ちゃぶ台方式」教職研修の内容	1
3 「ちゃぶ台方式」教職研修により展開されるプログラム	2
II 「ちゃぶ台方式」教職研修の各プログラムのイメージスケッチ	
【地域協働型教職研修】	
1 学校チューター	3
2 学力向上等支援員派遣	3
3 保育ボランティア	4
4 ちゃぶ台林間学校	4
5 体育実技ボランティア	5
【地域・教育機関等と連携した協働型教職研修】	
6 やまサポ・ボランティア	5
7 ちゃぶ台次世代コーホート	6
8 ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course	6
9 ちゃぶ台理科ネット	7
10 ICTサポーター	7
11 まなびのつながりプロジェクト	8
12 幼大連携ボランティア	8
13 あすなるボランティア	9
【個別的支援と省察】	
14 ちゃぶ台相談室（ほっとけん室）	9
15 教職概論支援	10
16 ちゃぶ台研修会	10
17 教職実践研究	11
III 令和7年度活動報告	
【地域協働型教職研修】	
1 学校チューター	12
2 学力向上等支援員派遣	14
3 保育ボランティア	15
4 ちゃぶ台林間学校	21
5 体育実技ボランティア	24
【地域・教育機関等と連携した協働型教職研修】	
6 やまサポ・ボランティア	27
7 ちゃぶ台次世代コーホート	29
8 ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course	32
9 ちゃぶ台理科ネット	35
10 ICTサポーター	39
11 まなびのつながりプロジェクト	41
【個別的支援と省察】	
12 幼大連携ボランティア	43
13 あすなるボランティア	46
14 ちゃぶ台としての教職相談室の活動	48
15 教職概論支援	52
16 ちゃぶ台研修会－教育DS勉強会	56
17 教職実践研究－ちゃぶ台プログラム参加者の意識調査	57
IV 協働型研修のハブとしてのちゃぶ台ルーム	
1 ちゃぶ台ルーム	59
2 オンラインちゃぶ台	60

あとがき

I 「ちゃぶ台方式」教職研修部事業の概要

1. 「ちゃぶ台方式」教職研修の理念と目的

学校をはじめとした教育現場には、様々な現代的な教育課題が山積しており、これらの課題に適切に対応できる教員や指導者の養成が求められています。

山口大学教育学部では平成17年度に、学生および現職教員、教育委員会担当者、地域の教育関係者、大学教職員が、それぞれの立場を越えて協働し、様々な教職体験、活動や省察を行うことにより、学校教育や教育事象の具体的な理解と課題解決能力の育成を図る教員養成・教職研修プログラム（「ちゃぶ台方式」による協働型教職研修）を立ち上げ、20年以上にわたって協働的なスタイルの教職研修に取り組んできました。

ちゃぶ台方式による協働型教職研修での学びは、教える者と教えられる者という一方向的な関係ではなく、互いに学びあう、高めあう関係の中で成り立つととらえています。我が国では、家族全員が上座下座のない丸い「ちゃぶ台」を囲みながら、温かく和やかな雰囲気の中で、語りあい、励ましあいながら人としての生き方、知恵や技を学ぶ文化があります。そんな「ちゃぶ台」を囲むスタイルの学びを創造し続けたいと考え、「ちゃぶ台方式」という名称が生まれました。

山口大学教育学部は、これら多くの学生や教員の「ちゃぶ台方式」に対する思いや願いを大切にしています。そして、「ちゃぶ台方式」教職研修として、学生等の自発的な実践意欲を尊重し、それを支援する教育システムの整備や学習・研修機会の提供等を行うことをとおして理念の実現を目指しています。

2. 「ちゃぶ台方式」教職研修の内容

「ちゃぶ台方式」教職研修の理念や目的を達成するために4つの内容に取り組みます。

- (1) 継続的・系統的に教育に関わる場として、児童生徒とふれあう学校チューターやヤマサポボランティア、保育ボランティア、学力向上支援、林間学校など様々な「地域協働型教職研修」を実施します。
- (2) 学校、地域や教育委員会等との連携による教員との授業研究、合同研修や、関係機関と協同活動に取り組むなど「地域・教育機関等と連携した協働型教職研修」を行います。
- (3) 学生が目的意識を持って実践活動に取り組むため大学教員等が相談に応じたり、振り返りや高め合いの研修を実施する等「個別的支援と省察」の機会や場を提供します。
- (4) 教育実践を多様な視点から振り返る日常的に開放された空間「ちゃぶ台ルーム」や、時間的・空間的制約を超えた情報共有の場整備し、体験と省察の積み上げを図る事業を実施します。

3. 「ちゃぶ台方式」教職研修により展開されるプログラム

「ちゃぶ台方式」によるプログラム(ちゃぶ台プログラム)は、令和7年度末現在で17プログラムあります。中には、教職を目指す他学部生や県内外の大学に在籍する学生や現職教員等が参加しているプログラムもあります。

多くのプログラムが、教員や指導者としての資質能力の向上をめざし、学校現場での教職体験や教育的活動を伴いますが、この「ちゃぶ台プログラム」は、参加者の自主性・主体性を基本とする部分に特徴があります。授業の空き時間や生活の余裕時間を活用し、自らの課題認識や目的意識をもち、積極的に教職研修に取り組む意欲や態度を有する学生たちが参加しています。これらのプログラムは、あくまで正課外の自主的・任意のものですが、教職志望学生の教職に関する学習・研修ニーズに基づく主体的な活動の支援、学習や研修機会や環境の提供に努めています。

なお、「ちゃぶ台プログラム」の要件を次のように定めています。

(1) 教員や教育関係者としての資質能力の向上を目指すものであること。

(例) 実践、研修会・勉強会、省察会、体験や経験知の蓄積・共有

(2) 「ちゃぶ台方式」教職研修の理念に賛同する多様な立場にある者が協働して行い、互いの教職資質を高め合う活動であること。

(対象者) 学生(教育学部生、他学部、他大学)、大学教職員、附属学校園教員、現職教員、教育諸機関関係者、保護者等

(3) 活動は、参加者の主体性・自主性を基本とすること。

(4) 実施場所はちゃぶ台ルームを拠点とし、本研修の理念が実現される他の場所においても実施する。

(5) 特定の運動団体や営利団体などの目的・活動に沿ったものであってはならない。

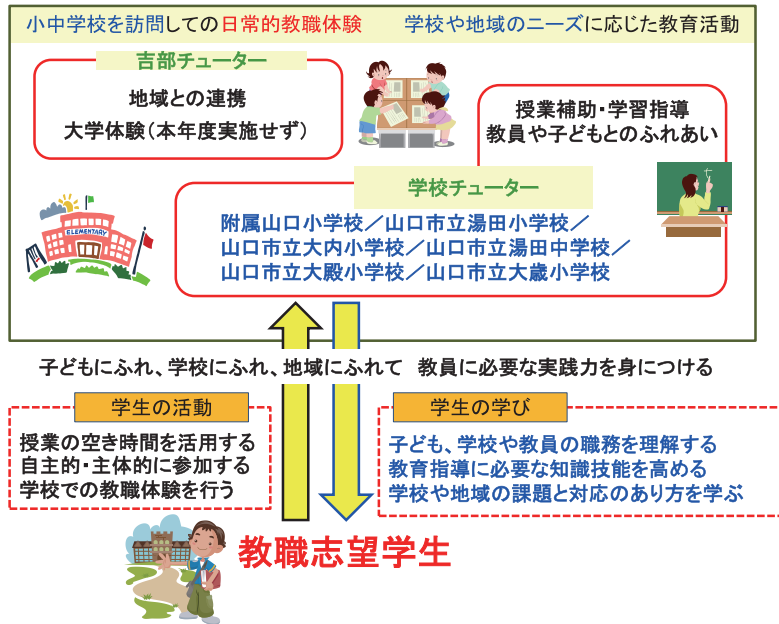


Ⅱ 「ちゃぶ台方式」教職研修の各プログラムのイメージスケッチ

【地域協働型教職研修】

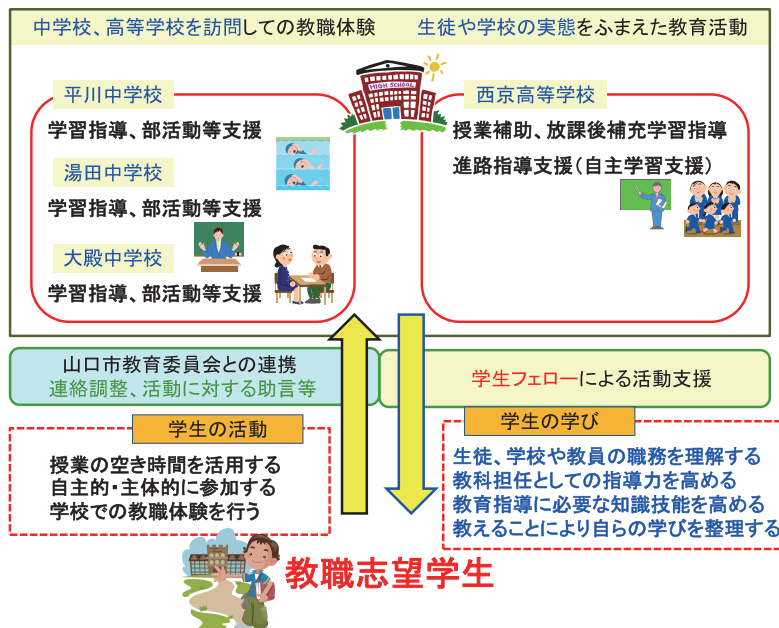
1 学校チューター

活動内容 教職志望学生の小学校派遣（授業補助、クラブ、放課後の遊び、発達障害児を中心とした特別支援教育指導補助）



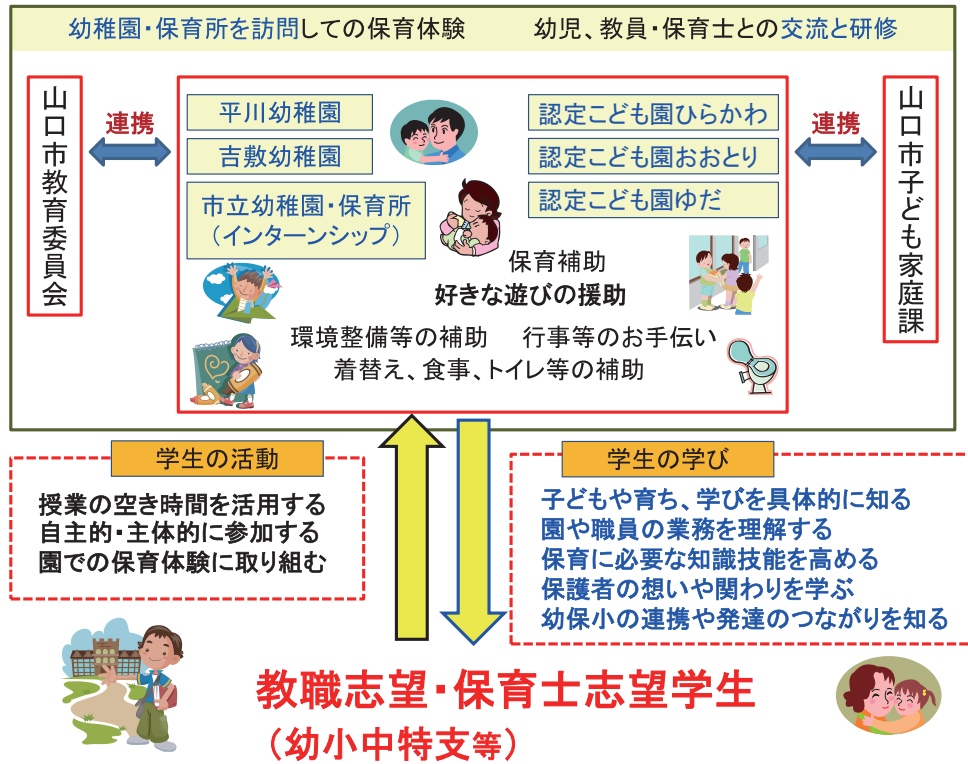
2 学力向上等支援員派遣

活動内容 教職志望学生の中学校・高等学校派遣（授業補助、相談対応や部活動等の支援）



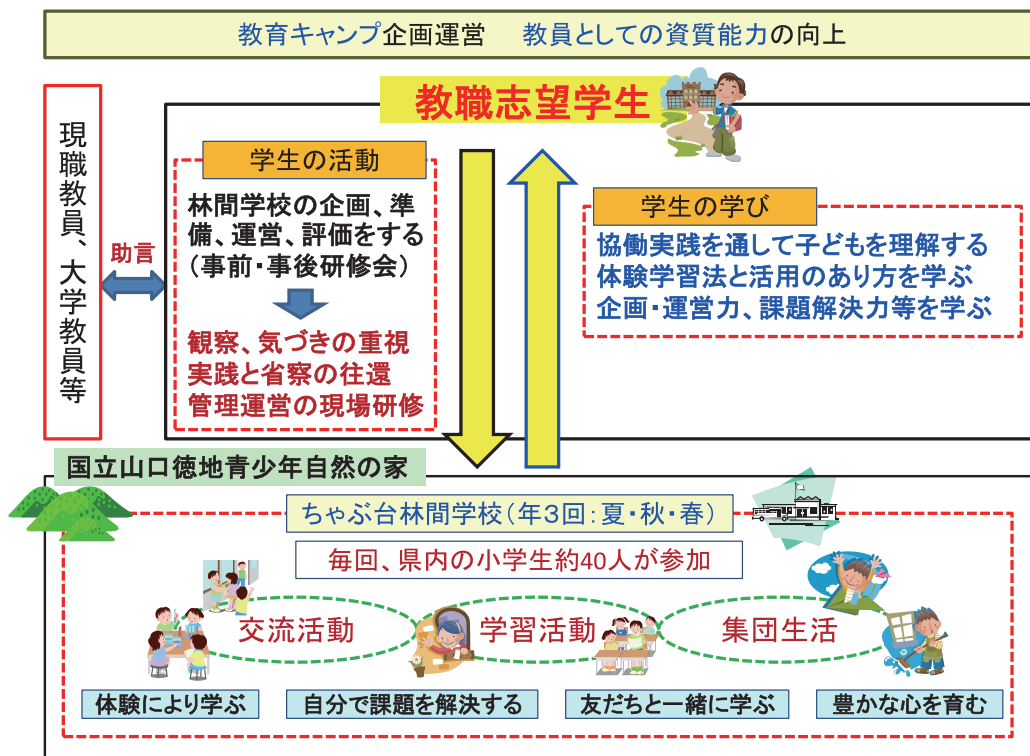
3 保育ボランティア

活動内容 教職、保育士志望学生の幼稚園・保育所派遣（保育補助や遊び等の支援）



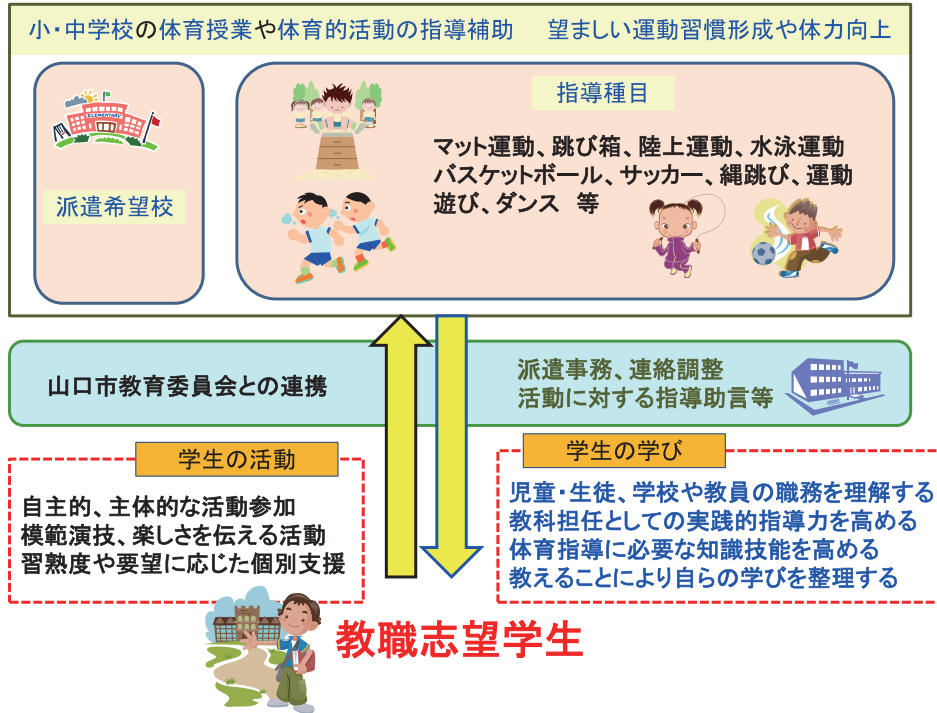
4 ちゃぶ台林間学校

活動内容 小学生対象教育キャンプの企画運営体験、指導経験と省察による実践研修



5 体育実技ボランティア

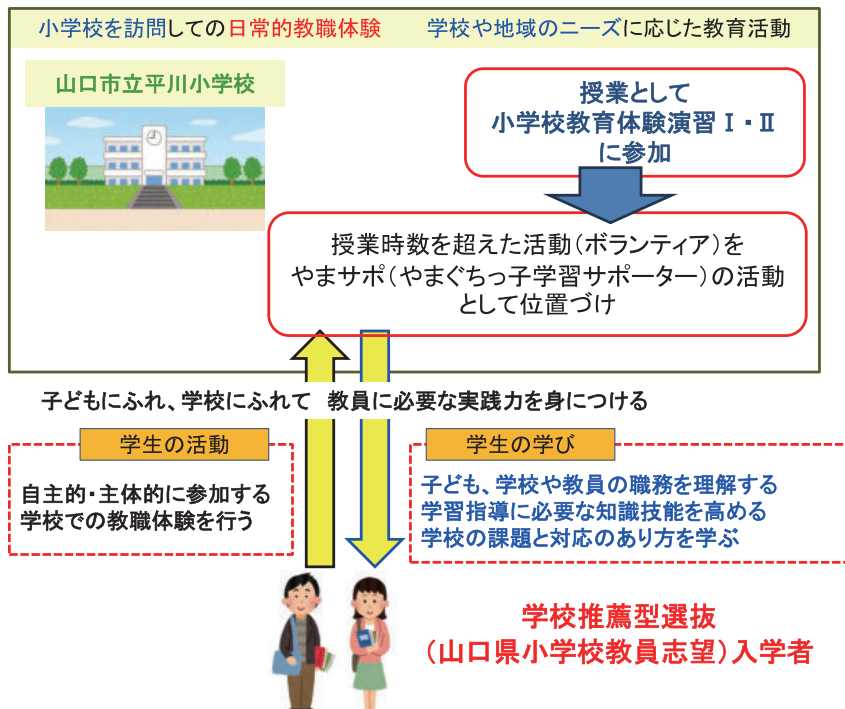
活動内容 教職志望学生等の小中学校派遣（体育補助、スポーツ・遊び等の支援）



【地域・教育機関等と連携した協働型教職研修】

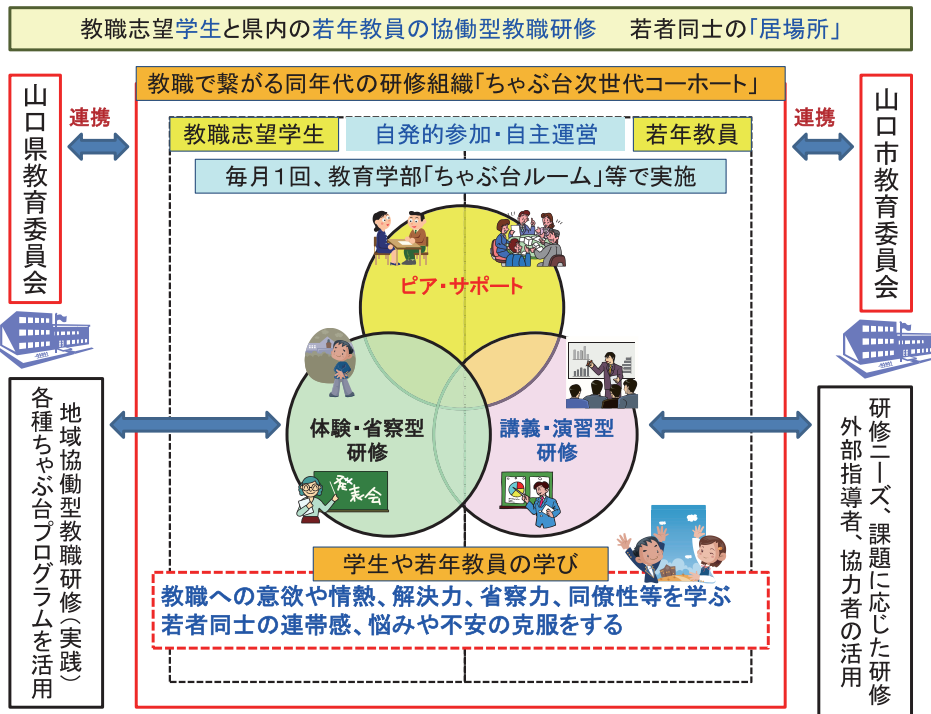
6 やまサポ・ボランティア

活動内容 教職志望学生の小学校派遣



7 ちゃぶ台次世代コーホート

活動内容 学生と若手の臨時的任用教員、本務教員による合同教職研修（養成と研修の一体化を図る研修事業）



8 ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course

活動内容 「学び続ける教師」を目指す現職教員を主対象とした協働的な教職研修



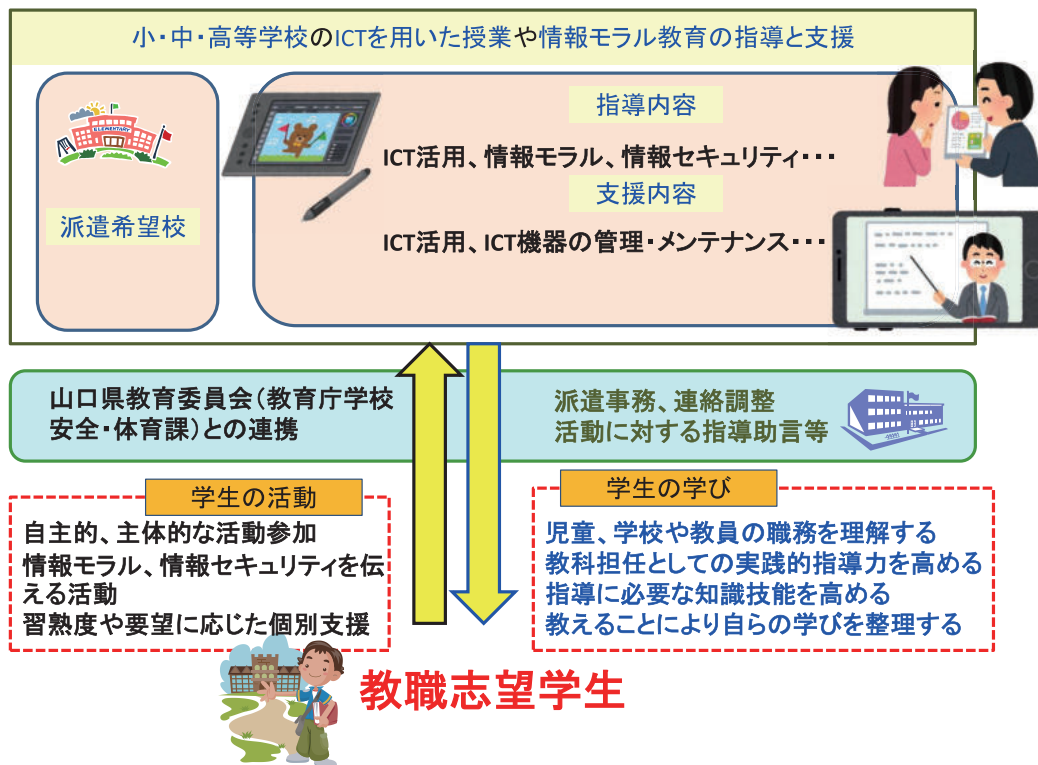
9 ちやぶ台理科ネット

活動内容 理科教育に関する学生、現職教員と大学教員による合同教職研修（理科教育の活性化を図る研修事業）



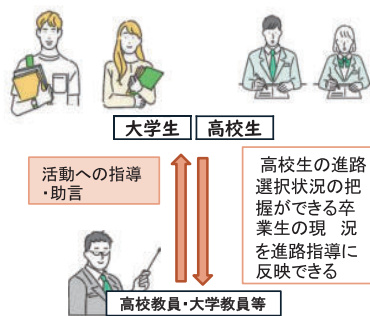
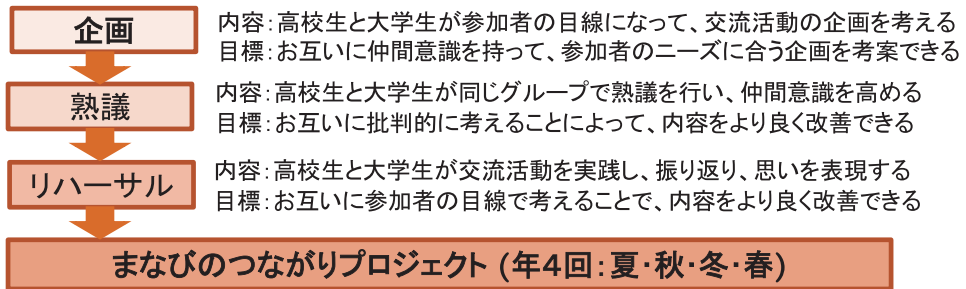
10 ICTサポーター

活動内容 学生によるICTを活用した授業の支援や情報モラル教育のサポート



11 まなびのつながりプロジェクト

活動内容 学生主体の探究活動により企画運営力・課題解決能力を向上させ、県内高校と持続可能なつながりを構築

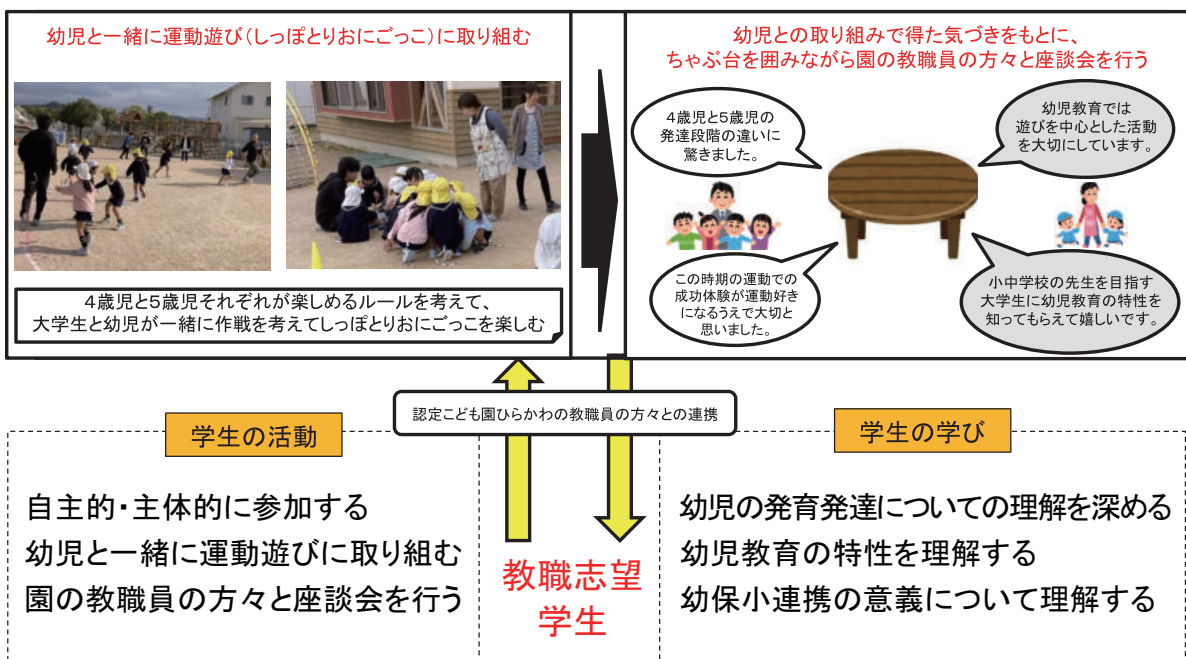


高校生と大学生の学び

- 協働実践を通じて、高校生は大学生を、大学生は高校生を、自身のキャリアと重ねて理解し、大学での学びとは何かを考える
- 省察的实践を通じて、企画・運営力や課題解決能力を向上させる
- 探究学習を通じて、自ら問いを見だし、探究することのできる力を向上させる

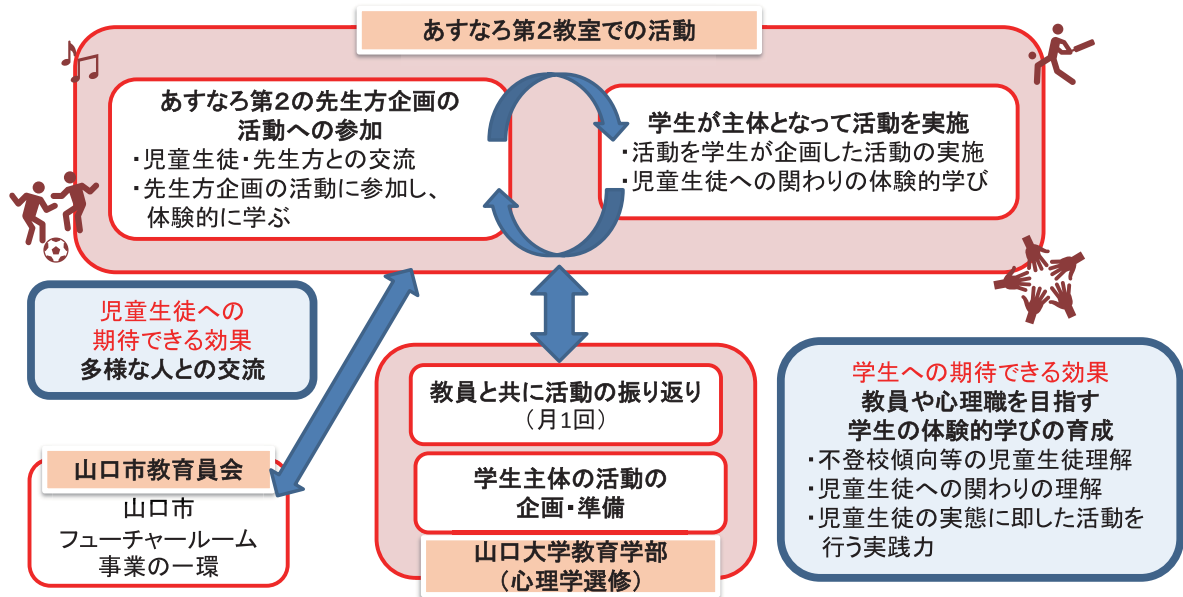
12 幼大連携ボランティア

活動内容 教職志望学生の認定こども園への派遣(運動遊びの支援)



13 あすなるボランティア

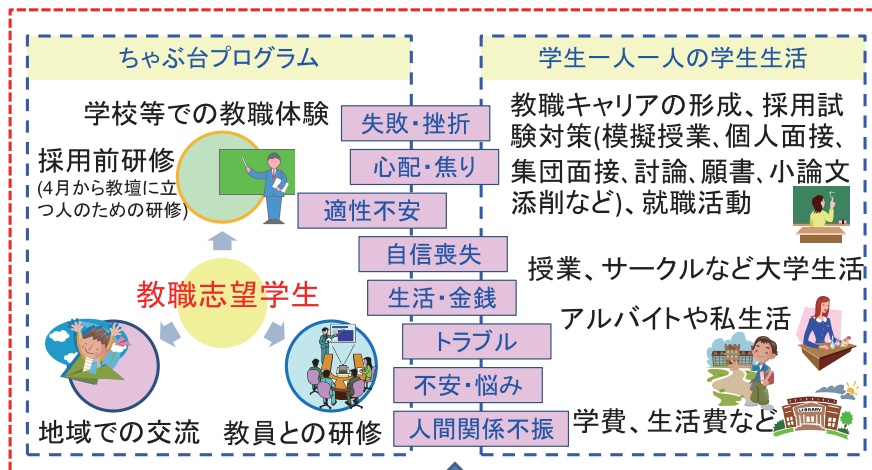
活動内容 教育支援センターを訪問しての活動体験 児童生徒や先生方との交流



【個別的支援と省察】

14 ちゃぶ台相談室 (ほっとけん室)

活動内容 教職経験者による教職・学業生活等に関する相談対応



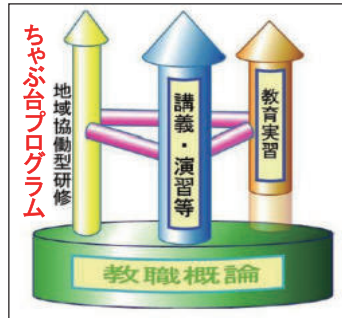
個に応じた相談活動、個別の指導助言・支援
 ちゃぶ台相談室(ほっとけん室)の開設 → 協働実践室(「ちゃぶ台ルーム」隣)
 相談担当 客員教授(校長、教育行政等経験者)2人
 相談曜日、時間帯 平日(9:30~18:00:時期により変更あり)

15 教職概論支援

活動内容 教職スタート科目「教職概論」の指導方法の工夫改善と支援

教職スタート科目「教職概論」

- 1 本学部における教員養成カリキュラムのスタート科目(教職の魅力、やりがい、使命感等の理解)
- 2 本学部における教員養成カリキュラムについて正しく理解させる科目
- 3 教職、学校教育や教職キャリア形成にかかる基礎的知識等について理解させる科目



教職概論支援

「教職概論」の授業改善による教員養成の活性化を図る

現職教員の活用

- 現職教員を囲む座談会 ・ 現職教員を講師とした授業

ちゃぶ台PG参加学生の活用

- ちゃぶ台PGでの学びの発表 ・ 教育実習や諸活動についてのアドバイス

ちゃぶ台ルームを活用した授業の実施

- 少人数編成、ちゃぶ台スタイル授業の拡大

キャリア形成に向けた指導の充実

- 教職キャリア、学び方やポートフォリオ作成等の指導



16 ちゃぶ台研修会

活動内容 理論と実践の往還のための研究会

「ちゃぶ台方式」による教職研修(プログラム)の「ハブ(hub)」



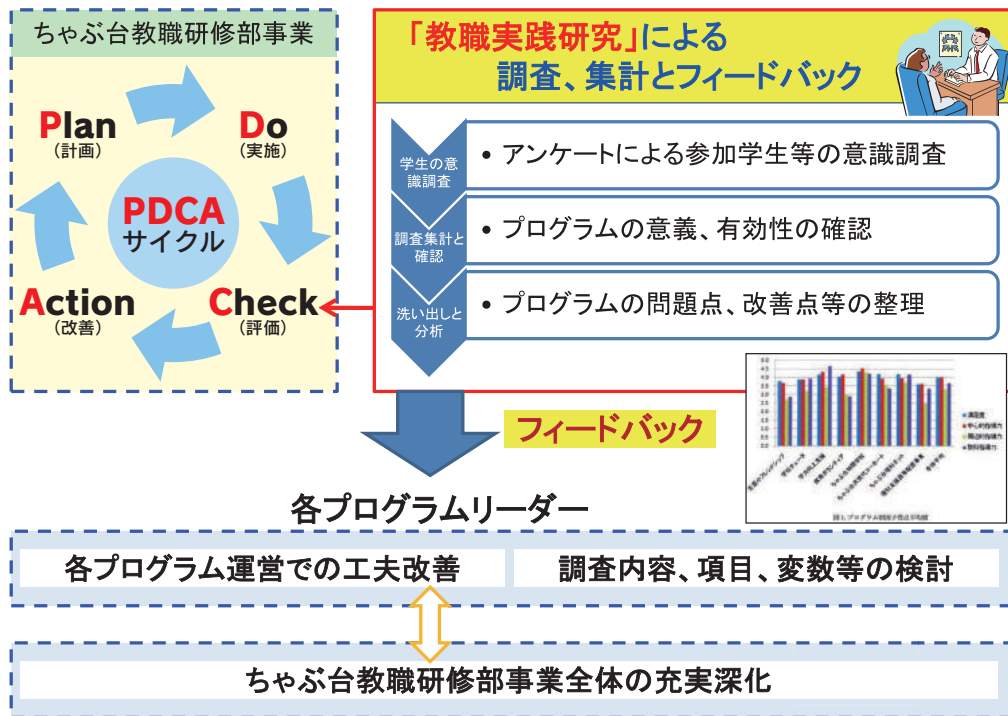
研修 省察 活動準備

ちゃぶ台プログラムの活性化



17 教職実践研究

活動内容 各ちやぶ台プログラムの効果測定（アンケートによる意識調査）、プログラムの意義、有効性や問題点、改善点の分析とフィードバック



Ⅲ 令和7年度活動報告

1. 学校チューター

1) 事業概要

「学校チューター」活動は、平成15、16年度に文部科学省が主導した「放課後学校チューター制度」をもとにしており、本年で23年目を迎える。放課後を活用した児童の学力向上（確かな学力の定着）と教員を目指す学生の資質向上を目的として4つの小学校から始まった活動も、年月とともに各学校および地域の実態に即した内容へと変化・発展し、実施校及び数とも当時とは異なっている。教員を目指す学生が、日常的に実践経験を積む場であると同時に、学生による学校支援としての期待も強く、学校からの学生派遣要請も増える傾向であったが、2020年に発生した新型コロナウイルス感染症によって、実質的な活動停止を強いられることとなった。

その後、2021（令和3）年度に事業の再開をめざして、小学校ならびに山口市教育委員会と個別に協議を行い、了解を得られた3小学校（附属山口小学校、山口市立湯田小学校、山口市立大内小学校）で、11月から12月にかけての短期間の活動再開を果たした。令和5年度からは、新型コロナウイルス感染症の扱いが「5類感染症」に移行（令和5年5月8日から）したことを受けて、慎重を期しつつ従前の活動に近づけた。令和6年度から本年度にかけては、コロナ以前の実施形態に近づけるべく、各学校および参加学生との調整等を行った。

2) 令和7年度の活動実績（参加登録学生数）

以下本年度チューター参加者（登録学生数）を示す。参加者総数は40名で、内訳は以下のとおりである。吉部チューターについては、リーダーとなる学生が放課後子ども教室の運営委員会に学生理事として参加し、活動内容に応じて参加学生を募る形式となっている。学校チューター活動を持続させる上では、学生が主体となって活動を運営できる体制を整えることが必要であり、吉部チューターは、その試金石となるものである。

また、吉部チューターについては、恒例の大学ツアーを、希望者（児童および保護者、地域関係者）を募って実施した。大学図書館などの施設紹介や大学の授業に触れる体験活動を通して大学に興味や親しみを抱いてもらうもので、次年度、吉部チューターのリーダーはそうして入学してきた学生であることを付記しておく。

なお、本活動に関しては、学生が入学時に加入する「学生教育研究災害障害保険（学研災）」ではカバーしきれない部分があるため、参加学生全員に「ボランティア保険」の加入を義務付けている。

【学校別参加登録者】

山口大学教育学部附属山口小学校	： 12名
山口市立湯田小学校	： 17名
山口市立大殿小学校	： 5名
山口市立大内小学校	： 2名
山口市立上郷小学校	： 1名
山口市立湯田中学校	： 3名
吉部チューター	： 活動に応じて参加学生を募る

3) 令和7年度の特徴(大学の授業との関連付け)

本年度は、大学の授業(小学校総合選修1年生後期「子ども理解演習」)において、学校チューター活動での観察を披露したり共有したりする場面を多くすることで、学校や子どもの実態を知る意義を教員を志す学生たちに意識づけることができた。以下の振り返りからも、学校での実践的な活動と大学の授業を連携させる効果が伺える。

〈学生の感想(一部抜粋)〉

- ・「演習の当初は教師役の言葉遣いやプリントの不備など表面的なミスを指摘することしか出来ていなかった。しかし、チューターでの見学を通じて低学年の底抜けの明るさや、高学年特有の静けさ、発表者が固定される教室の空気感などを知ることで、観察の視点が変わった」
- ・「(演習で)批判的に見る力がついた。いつも良いところばかり目を向けたり、悪いところを見つけてもポジティブ変換してしまっていたので、成長のための癖がついた。チューターに行ったときも、実際の先生の言動に注目するようになった。」
- ・「(演習で子ども役をして)子どもの実際のレベルに合わせようとしても、どこか本当の子どもの感じには近づけていないような感じがして、すごく悩んで毎回取り組みました。やはり現場の様子が大切なので、チューターでよく観察していこうと思います。」

(卒業研究との関連付け)

従来から、学校チューター活動での観察や振り返りを卒業研究として取りまとめることが行われてきた。本年度は、さらに踏み込んで、放課後子ども教室等、地域で子どもを育む活動と学校チューター活動との関わりについて過去からの経緯を含めた調査を行い、学生が地域に関わる意義を明らかにする取り組みがなされた。中山間地域においては、少子化や過疎化による地域の担い手不足が深刻となっており、チューター活動を通して学生が関わることで得られる双方のメリットは、持続可能な地域の仕組みづくりに貢献していることを確認できた。

教育課題となっている不登校児童生徒の居場所づくりに関しても、学校学校チューターに期待する声が聞こえてきていることから、このような社会事情を踏まえた研究フィールドを提供することも活動の意義と捉え、機能強化ならびに整備を進めて行くようにしたい。

4) 令和7年度の課題

本年度は、昨年度に引き続き、チューター活動をコロナ禍以前の状態に復し、さらにその意義や効果を高めるための取り組みを行った。その中で、チューター活動の休止や縮小を余儀なくされた期間が長かったことにより、いくつかの学校においてチューターの受け入れや運用に関するノウハウの多くが失われてしまっていることが明らかになった。新型コロナの影響が長引いたことで、その間にチューター活動を中心的に担当していた教員が転動したり、チューター活動が教職員の目に触れる機会が著しく減少したことなどが重なり、円滑な活動を難しくさせる要因になってしまった。持続可能な活動とするためには、これまでの活動を整理し、意義やノウハウなどを大学と学校が共有する仕組みの構築が必要と考える。

また、個人情報保護の意識が一層高まっているのを背景に、参加学生と学校との連絡網の構築が難しくなっている点も課題としてあげられる。学生については、LINEをはじめとするSNSの利用が標準化する一方でe-mailの利用が相当に低下している。大学ならびに学校からの連絡は、公式のe-mail使用が原則であるため、双方の意思疎通が滞る例がみられている。効果的かつ効率的な連絡手段の工夫が求められる。(文責:岡村 吉永)

2. 学力向上等支援員派遣

1) 活動の趣旨(目的)等

本プログラムは、教職をめざす学生を中学校・高等学校に派遣し、生徒や教職員等に長期的・継続的に関わらせることを通して、生徒、教職員、学校生活などを具体的に理解し、実践的指導力の基礎を身につけるとともに、学生の教職に対する意識や意欲の向上、資質能力の育成等を図ることを目指している。

2) 活動概要

コロナ禍で数年間中断した後、3年前から活動を再開させた。2年間は定期考査前の「勉強会」に単発で入らせていただくかたちをとったが、昨年度から「通常授業」に入らせていただいている。今年度は山口市立大内中学校で支援を行った。

今年度の支援員は、昨年度からの経験者1名(教育学部3年)で、延べ3日、計12時間の支援であった。担当スタッフが支援員本人、受け入れ校である大内中学校に対して丁寧に説明を行った後に支援をスタートさせた。

3) 支援員の振り返りとスタッフからのコメント

支援員

授業開始前に生徒たちと交流するように意識し、声かけや助言が行いやすくなるようにしました。授業中は、生徒の表情や行動に注目し、どの生徒が支援を必要としているのかを意識しました。こうすることでスムーズに支援できたと考えています。

自分の今後の成長課題ですが、生徒の思考を遮ることなく、どのように考えているのかを確認する方法を学んでいきたいです。私は生徒に対して、「今、どんな感じ?」というように質問しています。これには、思考をどのように巡らせているのかを尋ねながら、本人による思考の言語化を促したいという意図があります。ただ、こうした問いかけがはたしてよいのかどうか、はっきりしないところもあります。また、正解を教えること、教えすぎたと感じることもあります。どのようにすればよいのでしょうか。

スタッフ

- 教師のための授業 → 子どものための授業 → 子どもの立場に立った授業(この1時間は子どもにとってどうだったのか)
- 指導案(細案)の一番はじめに書くのは「生徒観」であり、教材観や指導観でないのはなぜなのでしょう? そこに生徒理解のヒントがあると思います。
- 大内中学校の先生方から学ぶことはたくさんあります。あなたに大内中学校を紹介してよかったです。そして、大内中学校の学力向上支援に、支援員であるあなたが大きく貢献していることが、何よりうれしいです。

(佐々木 司(代表)・佐野 崇幸・時乗順一郎)

3. 保育ボランティア

1) 活動の趣旨(目的)

保育ボランティアを通して、保育士、教員(幼稚園、小学校等)を目指す学生の資質向上を図る。

2) 令和7年度の活動概要

(1) 事業の実施期間と活動の概要

令和7年度の活動期間は、令和7年5月13日(火)～令和8年3月19日(木)

- ・今年度も5月の連休明けから活動を開始、週1回9:00～12:00(3時間)保育補助。
- ・インターンシップ(卒業研究も含む)は、4年生の希望者。原則毎週1回1日、通年。

*附属特別支援学校の就学前の子どもと保護者のための発達支援センターの活動『ヤマミイの一む』での保育ボランティアは、希望者はあったが、学校臨床心理学専攻の実習生の人数が十分であったことから募集は行わず、活動は控えた。

(2) 活動場所

保育ボランティア 園名	4年次インターンシップ 園名
山口市立平川幼稚園 山口市立吉敷幼稚園 ※認定こども園ひらかわ ※認定こども園おおとり ※認定こども園ゆだ	山口市立平川幼稚園 認定こども園ひらかわ 山口市立山口保育園 認定こども園おおとり *山口市立大内保育園 認定こども園ゆだ

※今年度より、愛児園平川保育所、おおとり保育園、湯田保育所が、認定こども園となり、園名も認定こども園ひらかわ、認定こども園おおとり、認定こども園ゆだと変更されている。
活動は、山口市教育委員会、山口市役所こども未来部保育幼稚園課の連携、協力を得て実施。

(3) 参加学生 (学生代表・副代表 幼児教育コース4年)

①活動登録者総数 24名

- ・保育ボランティア 登録者16名(*通年 1名)
- ・インターン(卒業研究含)登録者 8名
(内2名は登録のみで、就職活動、卒業テーマ等により、インターンの活動は中断した)



②学年別・コース別登録者数

所属/学年	1	2	3	4	合計
幼児教育	10	1	4	8	23
特別支援教育	1				1
合計	11	1	4	8	24

③4年次保育インターンシップ活動状況 活動数(延べ日数) 162日

園名	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	日数合計
認定こども園ひらかわ		5	8		4	6	6	4				33
認定こども園おおとり		2	2	2	1	4	2	2	2	1		18
山口市立山口保育園		3	4	4	3	5	4	4	3	4	3	37
山口市立山口保育園			2	4	3	5	3	3	3	3	1	27
認定こども園ゆだ			3	3	3	3	3	3	2	1	1	22
山口市立平川幼稚園		1	3		3	5	3	3	3	3	1	25
登録者数 8名	0	11	22	13	17	28	21	18	13	12	6	162

④保育ボランティア活動状況 活動数(延べ日数) 244日

園名	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	日数合計
平川幼	3	4	3		3							13
平川幼	3	4	3		4							11
平川幼							2	4	2	4	3	15
	6	8	6	0	7		2	4	2	4	3	42
認こ園ひらかわ	2	4	2	3	4							13
認こ園ひらかわ	3	3	3	2	3							11
認こ園ひらかわ	3	4	3	3	4							14
認こ園ひらかわ	3	3	3	2	2							10
認こ園ひらかわ							2	4	3	4	4	17
	11	14	11	10	13		2	4	3	4	4	76
吉敷幼	3	3	3		1							7
吉敷幼	3	4	3		4							11
	6	7	6	0	5			0	0	0	0	24
認こ園おおとり	3	3	3	3	3							12
認こ園おおとり	3	4	3	3	4		2	4	4	4	2	30
	6	7	6	6	7		2	4	4	4	2	48
認こ園ゆだ	3	4	3	2	3							15
認こ園ゆだ	2	4	4	1	4							13
認こ園ゆだ							3	2	2	1	2	9
認こ園ゆだ							1	3	3	3	4	15
	5	8	7	3	7		1	5	5	4	6	54
(通年 1名)	34	44	36	19	39		7	14	14	16	15	224

■保育ボランティア・保育インターンシップ 全活動総日数 406日

* 2月末現在の集計(3月末の予定も含む)

(4)活動の実際

今年度の活動全体について、保育ボランティア・インターンシップともに活動への参加を希望し、実際に活動に参加している学生は、いずれも大学の授業と活動予定を見通しながら主体的に取り組んでいる。それぞれの活動の開始から終了までの流れについては、参加する学生自身の能動的活動として進めていけるようこれまで本活動の積み重ねの中で築いてきたシステムによるものである。

まず、保育ボランティアについては、活動説明会への参加、活動するにあたってのオリエンテーション、参加登録表を提出した後は、希望園と曜日を担当が調整し、活動園ごとの月別活動予定表を学生へ提示、各園にも同じ月別活動予定表を届ける。学生は予定表で各自の保育ボランティア先と日程を確認した後、自主的活動として進めていく。それぞれの活動先の園での活動開始の初日は、園長や主任等から活動の仕方等について指導を受けたり学生は希望を伝えたりなど活動に見通しをもって安心して保育の場に入っていけるような時間も位置づけている。

4年次の保育インターンシップは、今年度は、学生の希望と活動先の調整等のため、6月より活動を開始した。それぞれの学生の就職活動、採用試験等への見通しと卒業研究のテーマ等を考慮した上で、受け入れ先の園の協力もいただきながら進めている。このインターンシップの活動は、週1回終日の活動を1年間続けていくものであるが、今年度は、就職活動等の関係で、途中中断することになった学生もあったが、参加した学生にとっては、1年という長い見通しの中で保育所や幼稚園等の生活を体験し、子どもの育ちを実感

してくことができる貴重な機会となっている。この体験は、保育の現場に出ていく上でのインターンとしての経験を十分に積み重ねられるものである。

附属特別支援学校の発達支援センター『ヤマミィるーむ』での保育ボランティアは、希望があったが、臨床心理学専修の実習を考慮して募集は控えた。しかしながら、『ヤマミィるーむ』での保育補助の活動の学生の経験の場として窓口を開いておくことは続けていきたい。

3) 今年度の活動の成果と今後の課題

今年度の活動の成果について、保育ボランティアの1年生の活動の振り返り「活動総括表」と、4年次の保育インターンシップの活動の振り返りから、学生の体験と学びを眺めていく。

〈保育ボランティア 活動総括表より 抜粋〉

私は、保育ボランティアで主に1歳と2歳のクラスに入らせていただきました。1歳クラスでは、話せたり歩けたり、子どもたちの個人の成長段階の違いを実感しました。自分の言葉で上手く話すことができない子が多かったため、その中で、一人ひとりの様子を見て、何を伝えたいのか、どうしてほしいのかを読み取ることを意識しました。また、給食では、野菜の好き嫌いがはっきりしていて口から出してしまったり、噛むのがゆっくりだったりする子たちに先生方が適度に声をかけて口を動かすように伝えているのが印象的で新しい学びでした。2歳児クラスでは、子どもたちが自らかけよってきてくれて、昨日のお家での出来事を話してくれたりするなど表現力が1歳児よりとても豊かだと感じました。また自分で挑戦したいという気持ちが強くなる時期であるため、手伝いすぎても嫌がられたり、逆に放っておきすぎると困ってしまったりする姿が見られ、それぞれの状況をよく見て関わるようにすることの大切さを実感しました。

保育ボランティアを通して、子どもと関わることの難しさや楽しさを実感すると同時に、自分自身も活動前よりも成長できたと思います。また、保育の現場でしか得ることができない経験ができたことで、子どもたちのための保育について今までよりも子どもたちの気持ちを考えて学習できるようになるとも貴重な体験ができました。

認定こども園 幼児教育1年

- ・実際に現場にいったと学べないことを学ぶことができた。保育ボランティアでの活動に参加して、子どもと関わったり先生方がどのように動いけたりしているのかを自分も一緒に行動するなど、多くのことに取り組むことができて、貴重な経験になったと感じた。
- ・子どもたちの様子を視野を広げて見るだけでなく、どんな会話をしているのか耳を傾けたり、子どもと一緒に楽しんだりするむことでその場の雰囲気も含めて環境をつくることも大切だと感じた。また子どもたちが生活する場所（室内や園庭など）の環境がどのような状態になっているのかという環境への視野も広げる必要があると学んだ。
- ・行事などでは他の年齢のクラスとの関わりもあるので、子ども同士の交流も大切であり、また、先生同士のコミュニケーションや情報交換などのやりとりも大切であると学んだ。
- ・子どもたちが自分たちで考えて行動する力を育むために「考えてみよう」と投げかけたり、時々助言をしたりなど、介入しすぎない距離感をもつことが大切なのではないかと感じた。
- ・子どもの個性は十人十色なので、一人ひとりどのような力を育てるために保育者にできることが何かを考えなければいけないと学んだ。

認定こども園 幼児教育1年

- ・子どもが自分自身で挑戦できるようになるといった自立を促すために、先生は環境を整え、基本的に見守っており、サポートが必要な時は必要なサポートをすることが大切だということが園でのボランティア活動にて一番心に残っている学んだことである。
- ・子どもが自由に成長できるような遊びの効果を最大限に引き出すために、先生は、日常的に子どもの様子を側で見守り、子どもの成長にあった環境づくりをし続けているということ学んだ。
- ・子どもたちとお話ししたり、全力で遊んだりすることで、はじめの頃よりも、子どもとの間で信頼関係が少しだけ築けたように感じ、コミュニケーションをあきらめずに続けてよかった。

幼稚園 幼児教育1年

右も左も分からなかった初日は、クラスの子どもたちに存在を認識してもらおうと、いろいろな子に話しかけて距離を少しでも縮めようと頑張った。それが、保育ボランティアの活動を重ねていくごとに、子どもたちの方から話しかけてくれたり、一緒に遊んでくれたりするようになり、教室に入ると抱きついてきてくれる子どももいた。また、一人一人の性格なども分かるようになり、その子に合わせた声かけなども心がけることができるようになった。子ども一人一人の理解ができるようになっただけでなく、幼児期の特性も少しは理解できたと感じた。給食の時間に先生が一人の子に「すごい！ピカピカやね」と声をかけたところ、他の子ども先生に褒めてもらいたいのか「先生！みてー」と食べ終わったお皿を先生に見せる子がたくさんいて、先生と関わりたい、ほめてもらいたいから他の子のまねをするという場面が多く見られた。

私は活動をする上で、視野を広くということを中心に心がけていたため、給食を食べ終わったこの着替えを先生方がされている時は、まだ食べ終わっていない子の側に行き、声かけなどをして寄り添ったり、私ができることを率先して行ったり、先生方が少しでも子どもたちのことを見られるようにするなどを行っていた。そのことを私がいていたクラスの担任の先生が褒めてくださり、とても嬉しかった。また子どものことだけではなく、先生方の動きの工夫など、先生に関することもたくさん学ぶことができた。

お昼は給食が基本だが、月に1回はお弁当の日があり、その時は教室にみんながもってきたレジャーシートを敷き、その上でお弁当を食べるというイベントがある。その時に先生方は一人一人のお弁当の中身を見て聴いて周り、一人一人に「美味しそうだね」などと言声をかけられていた。子どもにとって自分のことを気にかけてくれているというにしきにつながり、そのような積み重ねで信頼関係ができていくんだなと思った。また夏から始まった水遊びでは、子どもが濡れないように注意しながら、一緒にプールに入って子どもと同じ目線で遊んでいた。さらに感染症などの理由でみんなと一緒に水遊びができない子がいる時には、シャワーだけでも、足だけでも水に触れてもらおうとしていて、誰一人取り残さないといったような環境が作られていてとても良いなと感じた。

認定こども園 幼児教育1年

保育ボランティアを通して、子ども一人ひとりの成長の過程や、保育者としての関わり方の大切さを実感することができた。最初は、子どもたちが私に心を開いてくれるのか不安だったが、一緒に遊んだり話しかけたりしているうちに、少しずつ距離が縮まっていった。特に、外遊びや製作活動の時間には、子どもたちが自分の思いを表現したり、友達と協力して遊んだりする姿が見られ、子どもの成長の速さや表情の豊かさに驚いた。活動の中で特に印象に残っているのは、子どもたちがトラブルになった時の保育者の関わり方だ。すぐに解決しようとするのではなく、まず子どもたちの意見を聞き、気持ちに寄り添うことで解決に向かっていた。その姿を見て、子どもたちをただ叱るのではなく、トラブルを通して子どもたちの心の成長も支えているのだなと感じた。また、0歳児や1歳児のクラスでは、言葉が十分に話せない子どもとの関わり方も学ぶことができた。表情や声のトーン、スキンシップなど、言葉以外の方法で子どもたちとコミュニケーションをとることが多かった。子どもが笑顔になってくれたときにはとても嬉しかった。どのクラスでも朝教室に入ると「先生おはよう」「先生来てくれて嬉しい」と子どもたちから話しかけてくれて、自分が子どもたちにとって少しでも安心や信頼ができる存在になれたのだと感じた。

今回の保育ボランティアで学んだのは、子どもは、一人一人違うという当たり前であるがとても重要なことだ。発達のパースも、特に年齢が低いと差は大きく、個人差があった。興味があるものも当然異なり、同じことをしていても感じ方や楽しみ方が違っていた。その違いを尊重しながら子どもと関わるのが、保育者には求められていると考えた。これから自分が保育者を目指す上で、子ども一人一人の気持ちに寄り添い、安心できる関係をつくられるようにしたいと思う。半年間の保育ボランティアを通して、子どもたちと関わる楽しさを感じたが、どの分難しいと感じたことも多々あった。今回の経験を生かして、子どもたちの育ちを支えられる保育者を目指していきたいと思う。

認定こども園 幼児教育1年

〈4年次 保育インターンシップ 活動の振り返りより 抜粋〉

約9か月間インターンシップに参加させていただき、多くのことを学んだ。大学での授業や保育参加、基本実習や委託実習では、主に3～5歳児について学んでいたため、1～2歳児との関わりが初めてで、初めはわからないことだらけで不安だった。先生方の子どもたちへの接し方を見ていく中で、自分はどのように動いたら良いか、子どもたちにどんな風に声を掛けたら良いかを考えながら動くことができるようになっていったと感じる。

1歳児クラスに入ることがほとんどで、保育室内を走り回る子もいれば、まだ歩くことも難しい様子の子もいて、同じ1歳児でも発達段階にこんなにも差が生まれるのかと驚いたのを覚えている。また、オプション実習のために3週間ぶりに子どもたちに会うと、先生の言葉を繰り返していた子が会話ができるほど話すようになっていたり、歩くことも難しかった子が走るようになっていたり、この短期間でできることがこんなに増えるのかととても驚いた。1歳児クラスの先生方は、子どもたちの成長を共有し、子どもたちと一緒に喜ばれていて、子どもの成長を間近で見られること、そしてそれを喜ぶことができることが、保育者のやりがいにつながっているのだろうと思った。この9か月間で、私に不足していること、これからの課題として考えたことが2つある。1つ目は、歌や手遊びのレパートリーの少なさである。乳幼児の保育では特に、歌や手遊びをする場面が多くあった。また、歌いながら読む絵本もあり、ついていけないことがほとんどだった。1つでも多く自分のレパートリーを増やして、子どもたちと楽しい空間を少しでも多く過ごせるようにしたい。2つ目は、アレルギーや薬、病気などの対応力である。1歳児クラスにはアレルギーがある子がいて、給食時の対応や掃除の仕方を学んだ。また、薬を持参する子や登園後に熱が出て早退する子などもいて、その際の先生方の動きも見ることができた。園によって対応の仕方は様々であると思う。保育に入る前に、それらの対応についてしっかり確認し、少しずつできるようにしていかなければいけないと強く感じた。

インターンシップ最終日、ある子が「先生大好き！」と言って私に抱きついた。嬉しいという気持ちと共に、これからもっと頑張ろうと思った。子どもたちが安心して過ごせるために、全力をささげられる先生になりたい。

認定こども園インターン 幼児教育4年

一年間を通して4歳児クラスに入らせていただいて、子どもたちの成長を近くで見届けることができました。今回の4歳児クラスには、以前保育ボランティアとして子どもたちが3歳のときに、関わりました。そのこともありインターンシップの後半では、子どもたち一人一人の姿がすごく成長したように感じました。

子どもたちは、最初から「お姉ちゃん先生！」とたくさん話してくれて、私自身も子どもたちと遊んだり、話したりして関わるのが楽しかったです。初めは、緊張しているように見えた子どもも私と関わる機会が増えていくと、ご飯や遊んでいるときに、徐々に反応が表れきて、そのことも嬉しく感じました。

また、行事の準備や片付け、そして当日も参加させていただいて私にとって貴重な経験となりました。夏祭りでは、当日も参加して私は出店にずっといる役割でした。出店にいるのは保育者だけでなく、保護者の方も協力していただいていて、子どもたちも保護者も楽しめているように見えました。子どもたちはスタンプカードを持っていて、出店を周るとスタンプを押してもらえるようになっていました。それも、子どもたちは全部の出店に周ることや保護者がいる出店に行くことを楽しんでいました。運動会では、私は当日には参加できませんでしたが、練習には参加させてもらいました。4歳児では、パラバルーンやかけっこ、太鼓などをしました。パラバルーンはまず保育室の中で振りの練習をし、プレイルームや園庭で実際にバルーンを持って練習しました。子どもたちは振りの練習も楽しんでいましたが、バルーンを持つとより楽しそうな表情になっていたのがとても印象的でした。準備や片付けも手伝ってきたので、自分が実際に働き始めてから生かせることが多くあると感じました。

最後に、今回のインターンシップ先の園には2年生の頃から保育ボランティアでお世話になりました。そのため、ほとんどのクラスに入らせていただき、多くの先生方にお世話になりました。大学の実習だけでは乳児と関わる機会はなかったのですが、保育ボランティア、インターンシップを経験したことで、乳児とも関わることができました。これらのすべての経験を4月から保育者として、生かしていきたいと思いません。

幼稚園インターン 幼児教育4年

1年間を通して、5歳児クラスに週に1回木曜日に入らせて頂いた。運動会や発表会に向けて練習している姿から、できることが増えたり、協力して友達のことを思いやる様になる姿が増えたりと子どもたちの変化する姿を見ることができ、そこに対する保育者の援助や子ども同士のかかわりを見ていくことができた。子ども同士のかかわりが増えていく時期である5歳児だからこそ、子ども同士で遊びながら「これしよう」「これはなしね」などおたがいの思いを伝え、ルールを作っていたり、保育者が子どものつづやきを拾って共有することで子ども同士のかかわりが生れ、友だちの意見や思いを取り入れながら作品を作ったりといった子どもの姿や保育者の援助を見ることができた。また、1年間を通して季節の移り変わりによる子どもの生活の変化やその時期の行事に楽しそうに参加する子どもの姿を見ていくことができた。夏にはプラカップや鈴鉄砲など水遊びに連れられる道具が用意されたり、春にはひな人形を作ったり、卒園式に向けた絵本や歌が少しずつ増えていったりとその時期だからこそ見られるものや行事を保育者が取り入れていた。子ども達は生活の中で、例えば作ったひな人形をホールに飾り、みんなに見てもらうために看板を作ったり、小学校に見学に行った後に、保育園で学校ごっこをすることから、小学校での生活を楽しみに思う気持ちが芽生えたりと子どもなりに生活の変化を感じたり、行事に親しんでいた。保育者がその時期の行事や季節の特色を知り、子どもたちが楽しみながら、子ども自身で興味を持って取りくむ、体験できるような活動や遊びを準備、支えているからこそ見られたのではないかと考えた。

幼稚園インターン 幼児教育4年

1年生から参加が可能な保育ボランティアの活動は、保育の現場の日常の子どもの姿、保育者の役割などに学生自身が直接触れ、感じて考えて学んでいく機会を保障している。具体的には、本学への入学と同時に始まる授業の履修とともに、本保育ボランティアへの活動も始められることである。実際、学生自身の振り返りにも見られるように、本学に入学してきた学生が教育を専門として学ぶ環境へ期待や希望をもちながら学び始めると同時期に始められるこの活動は、保育現場での体験を通して、子どもの育ちや学びの姿を自分の体験として捉え考えていけることや保育者の姿を通して子どもに関わる仕事の魅力や意義、責任とともにその重要性を実感していくことを可能にしている。これらは、昨今、保育や教育現場での人材不足、保育者や教員を希望する学生の数の減少傾向などの現代的課題に向き合う活動としての可能性にもつながるものであると考えている。

本活動では、学生自身が自らの学びや成長を実感していくための方策として、この度示した活動後の振り返りの「活動整理表」をまとめるまでに、毎回の振り返りを整理していく「活動整理表」を毎月提出する形での振り返りも重ねていく仕組みもつくっている。そこには、学生の活動の振り返りとして具体的な子どもの姿の記録や自分のかかわりに関しての考察も示されていく。さらに4年次のインターンシップへの参加は、卒業後の将来を見通しながら保育現場での1年間の子どもの育ちを園の生活を体験しながら考えていく機会となっている。これらの積み重ねは、学生自身が実践現場で能動的に活動と振り返りを恒常的に実践していくことやそうした力を育てていけることが本活動の魅力でもあり、それは学生自らも実感できる成果となっていると考えている。

今後さらに本活動を充実させていくために協力園との関係の充実を引き続き大事にしていくこと、加えて、持ち越している課題である学生同士学びの機会の設定や時間のマネジメントについても検討を重ねていきたい。

(担当：川崎 徳子)

4. ちゃぶ台林間学校

1) 活動の趣旨(目的)

ちゃぶ台林間学校(「ちゃぶ林」)は、平成17年度より国立山口徳地青少年自然の家(以下、「自然の家」)との共催事業として実施されている林間学校型実践的指導力向上プログラムである。「ちゃぶ林」の目的は、子ども理解、集団生活指導、学びづくり、学習指導など様々な教育的課題を持った教員志望学生(大学生)が、異なった小学校から参加する小学生集団を対象に、宿泊を伴う子どもたちとの交流を通して子ども理解を深め、体験学習法を活用した「ちゃぶ林」の交流活動や学習活動を立案し実践することによって、教職に関する実践的指導力(子ども理解力、集団生活の指導力、学習・活動立案力、実践的指導力、教職に対する情熱、企画計画力・課題解決力、保護者や他組織メンバーとのコミュニケーション能力、同僚性や協働性など)を向上させることにある。この「ちゃぶ林」の特徴は、次の5つにまとめられる。

- ① 「ちゃぶ林」という同じ対象場において、各年代(小学生・大学生・高校生・中学生・若手教員・大学教員等)に対応した異なった学びの機会の提供
- ② 3回の「ちゃぶ林」における各回の学習課題の設定と事前踏査や学習機会の提供
- ③ 協働的な活動・学びづくりを通じた自己(大学生・高校生)の成長と他者との関係性構築
- ④ 子どもたちに対する本物の体験やその体験を通じた学びの提供
- ⑤ 多様な組織(教育諸機関、地域学校、附属学校園、大学)に所属するメンバーによる指導・支援

「ちゃぶ林」は、小学生及び大学生に学びを提供するプログラムであるが、平成19年度から山口県内で活躍している新任教員(臨採含む)が大学生指導と卒後研修の場として本プログラムを活用する場合もある(「若手教員研修会」をコーホート研修会との連携で実施)。同様に、教員養成学部への進学を検討している高校生を対象に、大学生を支援する役割を担う「ちゃぶ林」サポーターとしての学びの場を提供してきている。さらに、「ちゃぶ林」を卒業した中学生が、リーダー研修の一つとして、また自分自身を見つめ直してよさや課題を認識する研修の一つとして、「ちゃぶ林」を活用してリーダーシップや自己肯定感や自己有用感を高めようとするに対して、サポートを行っている。このように本事業では、新任教員、高校生・中学生、さらに、保護者(保護者向け説明会・報告会、保護者研修会)や我々指導スタッフなど各年代に対しても学びの場、研修の場を提供するプログラムとなっている。また、「ちゃぶ林」では、本学教員のみならず、共催である「自然の家」の専門職員(山口県教委との交流人事教員等)、県内の学校教員がスタッフとして連携して学生指導にあっている。さらに、「ちゃぶ林」の運営や生活・学習指導に対して、保護者から保護者報告会やメール等によってコメントや気づきを頂き、適宜学生へのフィードバックを通して保護者との関係づくりについて学ばせて頂いてきている。

2) 令和7年度の活動概要

(1) 本年度の事業概要と活動実績

令和7年度の「ちゃぶ林」の活動は、3回の子どもたちとの活動(「夏ちゃぶ：8月に山口大学で日帰り開催」,「秋ちゃぶ：11月に自然の家で1泊2日開催」,「春ちゃぶ：3月に自然の家で1泊2日開催」)が1回ずつ実施された。表1は令和7年度の「ちゃぶ林」各回の参加者数である。

表1：R7年度ちやぶ台林間学校の各回における参加者数

[活動名]	[参加者数]				
	小学生	中・高校生	大学生	スタッフ	卒業生等
夏のちやぶ台林間学校 (R7. 8/30)	15	0	9	1	0
秋のちやぶ台林間学校 (R7.11/15-16)	10	0	13	2	0
春のちやぶ台林間学校 (R8. 3/28-29)	16	0	9	2	0

(2) 本年度の取組の実際

① 夏のちやぶ台林間学校 (R7年8月30日)

「夏ちやぶ」は、山口大学教育学部とその周辺において、参加児童はお弁当持参で、10時から15時の日帰りで開催された。ちやぶ林の3つの約束は「1. 元気よくあいさつをしよう」、「2. ルールを守ろう」、「3. 協力しよう」であり、常に学生が声かけをして意識しながら活動が展開された。午前の活動では、はじめの会、自己紹介とアイスブレイクの後、2グループに分かれて、教育学部の外探検(虫探し、花探し等)をしながら、水鉄砲的あて、スーパーボールすくいが行われた。昼食後、午後の活動では、教育学部内の探検をしながら、うちわ作りやスライムづくりを行い、かき氷づくりと試食タイムが実施された。これらの活動では、周りの人や友達のよいところを1つ以上探そうという隠れミッションが子ども達に与えられていた。最後の振り返りでは、「みんなで協力して活動ができたか?」、「ルールやマナーを守って活動ができたか?」、「今日を通して友達のことをよくしれたか?」の3つの振り返りに対して3択(よくできた、できた、あんまり…)で○をつける活動が行われた。



写真：夏ちやぶ前の学生打合せ



写真：教育学部庭での水鉄砲的あて



写真：うちわづくりの様子



写真：作成したうちわを活用した風船ゲーム

② 秋のちゃぶ台林間学校（R7年11月15日～16日）

「秋ちゃぶ」は、国立山口徳地青少年自然の家を会場にして、1泊2日で開催された。今回の「秋ちゃぶ」は「春ちゃぶ」における野外炊事を目指し、そのための導入を体験する活動を行った。1日目は、2日目の芋づくりのための見通しを持つための前段階として、薪割りと火起こし、マシュマロとポップコーンづくりにチャレンジした。1日目の活動のなかで、子ども達が小さな挑戦を行い、その活動に学生が価値づけしながら、落ち葉集め、火吹き、火の番、応援など1年生から6年生までの8名が自身の役割見つけいくことになった。2日目は、1日目の見通しとモチベーションをもって芋づくりにチャレンジした。今回の「秋ちゃぶ」では、学生は、子どもの活動を通して、子どもの柔軟性、子ども同士のつながりづくりを学ぶことができた。1日目の午前中には個々で動いていた集団が、午後には複数でほどよくつながりながら活動でき、生活のなかでもつながりのよさや集団のなかで笑顔が多くなっていった。一緒になって身体を動かし、みんなで活動することを通して、その距離感が縮まっていった。この距離感を受けて、2日目には、他者のよさを発言できたり、メンバーの活動がその班に役に立っていることを言い合えたりといったグループメンバーの行動をリスペクトできる集団になることを目指して学生がサポートを進めた。



写真：燃えやすい乾いた葉っぱの準備作業



写真：半切りドラム缶を用いた焼き芋づくり

③ 春のちゃぶ台林間学校（R8年3月28日～29日[予定]）

「春ちゃぶ」は、山口徳地青少年自然の家において、1泊2日での実施を予定している。「秋ちゃぶ」で実施した火起こしと焼き芋づくりを踏まえて、2日目の野外炊事（カレーライスづくり）をメインの活動に据えている。そのために、1日目の午前と午後にチームビルディングを行うためのアイスブレイキング、さらに関係性を強くするための活動、そして野外炊事を見通すための活動を実施する予定にしている。

（担当 鷹岡 亮、高田 和宜、阿濱 茂樹、霜川 正幸）

（共催側担当 加藤 健三 次長、企画指導専門職[国立山口徳地青少年自然の家]）

5. 体育実技ボランティア

1) 活動の趣旨(目的)

体育実技ボランティアは、小学校や中学校などの学校現場に出向き、体育科授業および体育的行事の補助的な指導や、休み時間に子どもと運動遊びをすることなどを通して、児童・生徒の運動能力・体力の向上や望ましい運動習慣の形成に寄与することを大きな目的としている。また同時に、活動に参加した学生が、現職教員の学習指導や生徒指導に関わる技術や工夫を知るとともに、児童・生徒や教員との交流を深め、児童・生徒理解や学校文化を理解することも目的の一つである。ボランティアをする学生が、大学の講義では得られない知見をこのボランティアを通して学ぶことを期待している。

体育実技ボランティアの活動は、山口市教育委員会と連携・協力して行われているプログラムでもある。

2) 令和7年度の活動概要

山口市教育委員会と連携して、この活動を希望する学生を山口市立小学校3校と、中学校1校に体育実技ボランティアとして派遣した。詳細は以下の通りである。

(1) ボランティア派遣の流れ

- ①4月18日(金) 今年度の計画等について担当教員による打ち合わせ
- ②4月21日(月) 体育実技ボランティア募集説明会(図1参照)
 - ・活動内容について
 - ・今後の計画について
 - ・登録方法について
- ③4月30日(水) 山口市教育委員会へ挨拶・説明
- ④5月初旬、8月中下旬 派遣校へ挨拶・説明(派遣学生、教員)
- ⑤5月中旬～ ボランティア派遣学生(2年生)活動開始
- ⑥9月下旬～ ボランティア派遣学生(1・3年生)活動開始
- ⑦1月24日～2月24日 活動報告(派遣学生) ※「R7年度活動報告書」を提出
- ⑧毎月10日まで 「毎月の活動報告書」を提出

令和7年度 運動・遊び大好き!

**体育実技ボランティア
大募集!**

◆ ちやぶ台プログラム・体育実技ボランティア ◆ 学生用

目的：小学校や中学校などの学校現場に出向き、体育科授業および体育的行事の補助的な指導や、休み時間に共に遊ぶ等の活動を行うことを通して、子どもたちの運動習慣の形成・体力向上を図る。

体育実技ボランティアとは？ ※山口市教育委員会と連携して実施します。

- ①活動内容：体育授業での補助、体育的行事(運動会、陸上記録会など)の補助、休み時間に子どもと運動遊びをすることなど
- ②活動時間：1週間に半日程度の活動 ※具体的な曜日、時間帯は、派遣校との協議により決まります。
- ③条件：学生教育研究災害備蓄保険(学研災)または学研災付帯賠償責任保険(学研賠)への加入
- ④資格：山口大学教育学部学生
- ⑤派遣先：近隣の小中学校 ※派遣校は、登録後に、近隣の小中学校と相談の上決まります。
- ⑥申込み：下記の担当教員に、登録書を提出してください。
- ⑦申込期限：令和7年4月24日(木)18時まで

注意

- ・派遣校までの移動は徒歩あるいは自転車とします。
- ・活動可能な曜日や時間帯について、よく考えて登録して下さい。
- ・活動の際の身なりや言動には十分に注意してください。
- ・無断で活動を休まないこと、遅刻しないこと。
- ・1年生は学校体験制度を経た後から活動を開始していただきます。

※ 問い合わせ等は、下記担当にお問い合わせください。

保健体育教室 曾根 宗子	TEL : 083-933-5389
	E-mail : sona@yamaguchi-u.ac.jp
上地 広昭	TEL : 083-933-5379
	E-mail : uechi@yamaguchi-u.ac.jp
教育実践総合センター 河村 直子	TEL : 083-933-5461
	E-mail : naoko07@yamaguchi-u.ac.jp

(2) 活動実績(2月26日時点)

①小学校ボランティア 登録学生5名、活動参加者数(延べ数)29名

派遣小学校	派遣学生数	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	延べ人数
平川小学校	2	4	4				2					10
湯田小学校	1						4	4	2	2		12
大歳小学校	2					2	3	1	1			7
合計	5	4	4	0	0	2	9	5	3	2	0	29

(名)

②中学校ボランティア 登録学生2名、活動参加者数(延べ数)17名

派遣中学校	派遣学生数	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	延べ人数
平川中学校	2	2	3	1			4	3	2	2		17
合計	2	2	3	1	0	0	4	3	2	2	0	17

(名)

3) 成果と今後の方向性について

(1) プログラムの成果

本プログラムでは、参加学生は主には体育科授業の指導補助、加えて他の授業や学活の補助なども行った。学校現場でのそれらの活動(経験)を通して得たものとして、学生は、「低学年と高学年の差を感じ、対応の難しさを実感した。対応の仕方が分からないなりに、子どもと関わったが、難しい時は、先生方の行動の観察に徹した。少しずつ慣れてきたので、来月はもっと積極的に話しかけたい。(学生A・小学校・10月)」「これまでの活動を踏まえ、今月も子どもと関わりながら支援の在り方を意識して取り組んだ。活動内容に応じて個別に声をかける場面が多く、伝え方や関わるタイミングの重要性を改めて実感した。(学生A・小学校・1月)」「現在私自身が体育の授業でマット運動を行っている内容がそのまま授業で行われていたので、指導に深みを持つことができた。特別支援の生徒への指導(ボール運動)に関しては、今までにない視点での考え方で行うことができ、良い経験になった。(学生B・小学校)」「5、6年生の授業に入らせていただき、1年生とはまったく異なった内容、指導方法、方針に改めて気づかされた。5、6年にもなると体格などの男女差も見えるのでより違う角度での難しさがあると感じた。(学生C・小学校)」「生徒との関係性が低いと生徒から話しかけられることがないので、積極的に自分からコミュニケーションを取ることが重要だったと感じた。(学生D・中学校・6月)」「3年生のソフトボールでは、2年次でのソフトボールの授業で通常通りピッチャーが投げた活きた球を打っていたが、上手く打てず、授業がスムーズに進行しなかったと聞いた。そこで、今年は、トスバッティングに変更して行っていた。生徒の実態に合わせた授業が行われていた。(学生D・中学校・10月)」「どの授業でも肯定的なフィードバックが多くみられていて、とてもフィードバックの方法について参考になった。自分が授業を行う際にも、多くフィードバックが行えるようにしていきたい。(学生E・中学校)」等を報告していた(学生の「毎月の活動報告書」より)。したがって、このプログラムに参加することにより、学生は、現職教員の学習指導や生徒指導に関わる技術や工夫を知ることができ、児童や生徒との交流を通じて子ども理解が深められたことに加えて、大学における教科専門・教科教育の授業等についても、これから目標をもって学ぶことの重要性に気づくことができたのではないかと考えている。

(2) 今後の方向性について

来年度も、児童・生徒の運動能力・体力の向上や望ましい運動習慣の形成に寄与するとともに、学生が学校現場を理解したり、指導技術を向上したりする機会の提供のため、山口市教育委員会との連携・協力のもと、

本活動を継続して実施したいと考えている。

☆☆☆ **学生の声** ☆☆☆ 学校：湯田小学校 活動内容：保健体育授業での補助（陸上運動、跳び箱、マット運動、ボール遊び）

活動を通して、子どもの反応や表情を手がかりに関わり方を調整する力を得たと感じている。実際に助言が伝わる場合とそうではない場合を経験したことで、声かけの内容だけでなく、タイミングや距離感の重要性に気づき、実践的な指導感を深めることができた。

現場の先生方が丁寧に対応してくださり、安心して活動に取り組むことができた。多くの学びを得られる、実りのある活動であった。

3年生「R7年度活動報告書」より

☆☆☆ **学生の声** ☆☆☆ 学校：平川中学校 活動内容：体育授業での指導補助、保健の授業や特別支援学級の授業の参観

特に印象に残ったのは、授業における「規律」の重要性である。技能の向上や思考力・判断力を育成することも重要であるが、その前提として時間を守ることや挨拶を徹底することなど、人として当然の行動を丁寧に指導することが、授業全体の円滑な運営につながっていると感じた。規律が整うことで活動の切り替えがスムーズになり、生徒の集中度も高まっているように見受けられた。

今後は教材研究をより深め、生徒の技能や思考力・判断力の発達を促す学習内容を構想できる力を身につけたい。また、規律を整えるための具体的な指導方法についても実習を通して実践的に学びたいと考えている。

2年生「R7年度活動報告書」より

(担当 曾根 涼子、河村 直子、上地 広昭)

6. やまサポ・ボランティア

1) 活動の趣旨(目的)

やまサポとは「やまぐちっ子学習サポーター」の略称であり、山口大学教育学部に山口県小学校教員志望枠で入学した学生が、平川小学校において年間を通して学習支援に携わる取組である。学生は大学の授業のない日に学校を訪問し、授業の補助や個別の学習支援、教材準備などに参加している。本活動の目的は、学校現場での継続的な体験を通して児童理解を深めるとともに、実践的な学習支援の方法を身につけ、教師の仕事の役割や意義を具体的に理解することである。近年、教員には教科指導力に加えて、児童との関係づくり、学習面や生活面で困難を抱える児童への支援、学級経営や学校行事への対応など幅広い実践力が求められており、これらは大学の講義のみでは十分に身につけることが難しい。このため、本活動は将来教壇に立つ学生にとって、実践的力量を養う重要な学びの機会として位置付けられている。

(2) 活動の概要(実績)

本年度のやまサポ活動では、授業中の学習支援を中心に、運動会などの学校行事の補助、給食や清掃活動の支援、校外学習の引率補助、さらに平川小学校6年生による山口大学訪問活動の支援など、多様な教育活動に関わった。日常的な授業場面から学校全体の行事に至るまで幅広く参加することで、学生は学校教育の実際を多面的に理解するとともに、教育活動を支える一員としての役割を担った。

(3) 成果

本活動を通して、学生の児童対応力および実践的指導力の向上が顕著に見られた。活動開始当初は児童への声かけの仕方や関わり方に戸惑い、教室の後方で様子を見守ることが中心であった学生も、継続的な経験を重ねる中で状況に応じた適切な対応ができるようになった。例えば、授業中でも関わりを求めて話しかけてくる児童に対して「今は授業中だから後でね」と学習状況を踏まえて声をかけたり、児童同士のトラブルの際には一方的に叱るのではなく、児童が納得するまで話を聞いたうえで振り返りを促すなど、教育的配慮に基づいた行動が見られるようになった。こうした変化は、学生自身にとっても大きな成長として実感されている。

また、本活動は児童にとっても学びの機会となっている。平川小学校6年生の山口大学訪問では、大学生と将来の夢について語り合う場面があり、大学生から「誰かの一生に関わりたい、誰かの大切な一日を作りたい」という夢は変わっていないが、その夢をかなえる職業は美容師から教師に変わった」といった話が語られた。これに対して児童からは「夢が決まっている大学生はカッコいいと思った。自分を知ることから始めて、7年後には私も夢に向かって進んでいきたい」といった感想が聞かれ、将来について主体的に考える契機となっていることがうかがえた。

さらに、学校側からも本活動の意義が高く評価されており、平川小学校からは今後も本取組を通して学校と大学の連携を継続したいとの意向が示されていることから、地域連携の観点からも大きな成果があったといえる。

(4) 課題

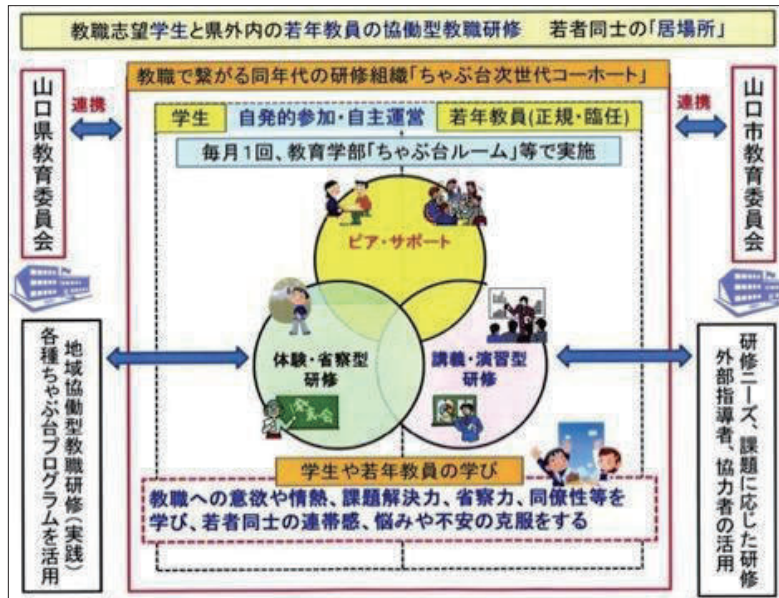
一方で、運営面における課題も明らかになっている。特に1・2年次の時間割では連続した活動時間を確保することが難しく、参加機会が制限される場合があるため、制度の効果を十分に発揮するには学部カリキュラムとの調整が必要である。また、教員志望卒の学生は所属専修が分散しているため、学生同士のつながりが形成されにくい傾向がある。やまサポは交流の機会として一定の役割を果たしているものの、専門の授業等においても共に学ぶ場を設けることができれば、将来同じ教育現場に立つ仲間としての意識がさらに高まることが期待される。

(文責：高橋 俊章)

7. ちゃぶ台次世代コーホート

1) 活動の趣旨(目的)

このプログラムは、山口大学と山口県・山口市教育委員会が連携し、教職志望学生と教職経験の浅い若年教員(正規教員、臨時的任用教員)による協働型研修組織「ちゃぶ台次世代コーホート」を設立し、教育実践や教職体験の共有と省察、教え合い・学び合い等をさせることにより、教員としての資質能力の深化、教職実践課題の解決力や省察力の醸成等を図る教員養成・教員研修プログラムである。平成19年度に開始し19年目を迎えている。



2) 令和7年度の活動概要

(1) 研修プログラムの受講生の構成や参加者について

本プログラムの本年度の登録者数は、78人(Advanced course登録者も含む)であった。教員は、県内を中心として、茨城・大阪・広島からの登録があった。参加者数(延べ数)は、518人であった。学生は、本学においては、教育学部・理学部、本学教職大学院の登録があった。教育学部の学生は、昨年度から引き続き登録した者も多いが、それ以外は、登録者からの口コミから情報を得ていた。理学部の学生は、教職センターの教員からの紹介で昨年度登録し、本年度も引き続き登録している。本学以外の学生は、県内からは至誠館大学からの登録があり、県外の大学からの登録はなかった。

(2) 令和7年度「ちゃぶ台次世代コーホート」研修会の実際

本年度も、県内外の若手・中堅教員等が「ちゃぶ台」理念に基づく協働型教員研修組織「ちゃぶ台次世代コーホートadvanced course」研修会と合同で研修会を5回開催した。なお、本プログラムは、学生と若年教員の自主的、自発的な研修事業であり、「参加できる時に、参加できる範囲や形で、自由に関わる」スタイルを原則とした。第1回から第5回までの日程、研修テーマと内容、講師等は以下のとおりであった。

①第1回 令和7年10月4日(土) 13:30~17:00

[Advanced courseと合同開催]

- ・会 場：山口大学
- ・内 容：研修開き、学級づくり



- ・ 講 師：大学教員
- ・ 参加者：教員15人、学生18人、講師・関係者12人 計45人

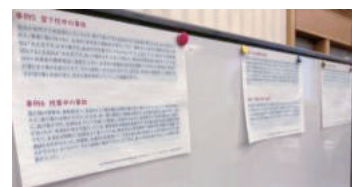
②第2回 令和7年11月30日（土）9：00～16：00 [Advanced course・教育フェスと合同開催]

- ・ 会 場：山口大学
- ・ 内 容：授業づくり、キャリア形成、いのち、プログラミング、地域課題の解決、生成AIとの活用等
- ・ 講 師：コーホート登録者、Advanced course登録者、大学教員、教員、学部生、企業他
- ・ 参加者：295人



③第3回 令和7年12月27日（土）9：30～12：30
[Advanced courseと合同開催]

- ・ 会 場：セントコア山口
- ・ 内 容：学校法務
- ・ 講 師：大学教員、弁護士
- ・ 参加者：教員26人、学生19人、
講師・関係者18人 計63人



④第4回 令和7年12月27日（土）13：30～17：00
[Advanced courseと合同開催]

- ・ 会 場：セントコア山口
- ・ 内 容：学校と家庭（保護者）との関係づくり
- ・ 講 師：山口県PTA連合会役員
- ・ 参加者：教員22人、学生17人、保護者10人、
関係者16人 計65人



⑤第5回 令和8年3月14日（土）13：00～17：00
[Advanced courseと合同開催]

- ・ 会 場：山口大学
- ・ 内 容：1年の振り返り、これから（ステージ1・2期にある）の教員の在り方
- ・ 講 師：大学教員、市教育長
- ・ 参加者：教員25人、学生15人、講師・関係者10人 計50人

(3) 令和7年度ちゃぶ台次世代コーホート」研修会通信について

参加したくても予定が合わない登録者もいるため、研修会の様子や研修会に参加した登録者がどういった学びがあったと感じているのかについて共有するために、各会において通信を作成している。参加者にとっても、他の参加者の気付きや感想にふれることができる通信である。

2025年度 コーホート 19年目のHop! Stepi Jum!

「Advanced course」と「Basic course」本年度最初の合同研修会

10月4日の午後、本年度初のコーホート研修会(Advanced course第4回研修会)を、山口大学にて開催しました。今回の参加者は、受講生33人(前期教員15人、学生18人)、大学教職員1人、専任教員1人、講師2人、既見スタッフ2人、計40人でした。一昨年度から、託児サービスも行っています。託児サービスは、受講生からの要望があること、主催者(総務)として「学び続ける教員」の育成や教職キャリアの形成支援には欠かせない課題、子育て支援や働き方改革に資する課題と捉えていること等をふまえて、実施しているものです。託児サービスが本研修会で行われることで、教職志望学生や若手教員にとっても、今後の教職キャリア形成をイメージすることにつながっていくと考えています。

この通信では、受講生の感想と写真で、研修会がどんな様子であったか、どんなことを学んだのか等についてお伝えします。

研修びらき

【自己紹介タイム】
「研修びらき」では、まず、自分の名前を使った自己紹介を行いました。

【チームビルディングの活動】
自己紹介を通して、班のメンバーと打ち解けたことで、以下のような活動を行います。途中で海賊が出てきて、どんなアイテムが奪われていきます!!!

班で協力して解決しよう!

無人島にたどり着いた〇班のみさん!

島には、小さな森、果物魚などの食べ物、そして、水がありますが、他には何もありません。

そこで、島で生き抜くために、何が必要だと考えますか。次に示すアイテムから必要だと思うものを5つ選んでください。

A 罌	1 料理
B 水筒	2 調理器具
C 魚	3 魚
D 果物	4 マット(100枚)
E 道具	5 水
F 道具	6 水
G 道具	7 水
H 道具	8 水
I 道具	9 水
J 道具	10 水

【初めまして】の方とも知っている方とも、深く関わることができました!

初めましての人たちとしっかりと交流ができました。ここでのアイスブレイクが、その後の研修の充実につながりました。特に、「あいうえお作文」は学級別にも使えらるし、今後管理職等になった際に職員室聞き等に利用できると思います。(中学校教諭)

自己紹介をする際に、相手の印象に残る工夫をすることの大切さを改めて実感した。教員であれば、主に年度初めに新しいクラスの生徒や同僚の先生方に向けて自己紹介をする機会がある。その際に印象に残る自己紹介をすることで、その後の人間関係につながることを考えるのが今回のあいうえお作文以外にも自己紹介を考えておきたい。また、グループの方の意外な一面を知ることができたので素晴らしい時間となった。(大学院M1)

講義・演習

★テーマ：集団・学級づくりの面白さと 教員としての関わり
香川大学大学院教育学研究科 准教授 大西 美輪 さん

2025年度 コーホート 19年目のHop! Stepi Jum!

改めて、共に学ぶ・学び合う意味について考えました!

10月4日の午後、本年度初のコーホート研修会(Advanced course第4回研修会)を、山口大学にて開催しました。今回の参加者は、受講生33人(前期教員15人、学生18人)、大学教職員1人、専任教員1人、講師2人、既見スタッフ2人、計40人でした。一昨年度から、託児サービスも行っています。託児サービスは、受講生からの要望があること、主催者(総務)として「学び続ける教員」の育成や教職キャリアの形成支援には欠かせない課題、子育て支援や働き方改革に資する課題と捉えていること等をふまえて、実施しているものです。託児サービスが本研修会で行われることで、教職志望学生や若手教員にとっても、今後の教職キャリア形成をイメージすることにつながっていくと考えています。

この通信では、受講生の感想と写真で、研修会がどんな様子であったか、どんなことを学んだのか等についてお伝えします。

改めて、共に学ぶ・学び合う意味について考えました!

無人島に持って行くものについて、最終的に預けたいものが私たちの期ではみんな違っており、多様な視点から様々な意見が出ました。私は編を選びましたが、「万が一食料や道具が準備できないのではないか」「編は持参品を作ることはできないか」という意見を聞き、驚かされました。話し合いの最後は、「自分の意見を言うことができたか」、「相手の意見を聞くことができたか」という問いかけがありました。私は、話を聞いて相手を打つことが多く、自分の考えを積極的に言えていなかった場面もあったので、話す聞くのバランスを考えながら、今まで以上に自分から話し合いに参加していくようにしたいです。(大学4年生)

今回の研修では、「無人島にもっていく何がいいか」という定題のテーマを用いた学級づくりの活動を体験した。20種類ほどの道具から5つを選び、グループ内で共有するという活動であった。途中で「海賊が来た」という想定が入り選択肢が減っていく等、ストーリー性をもたせた展開になっており、自然と話し合いが盛り上がった。この活動は一見よくあるお題ではあるが、学級づくりという場面に非常に適していると感じた。同じ課題に取り組みながら、互いの考えを出し合い、グループとしての合意形成を図るという経験を通して、学級の人間関係づくりや集団の雰囲気づくりが促されていた。また、主観的な意見を尊重し合いながら、最終的に一つの選択をするという過程は、「自分と他者の違いを受け入れる」体験にもつながっていると感じた。さらに、活動後に各組で「重要な道具ランキング」を作成し、金枠で共有する流れがあったことで、他のグループの価値観や考え方もふれることができ、相互理解がより深まった。こうした仕掛けにより、単なるアイスブレイクに留まらず、協力的な学びの基盤をつくる工夫がなされていた。今後自分が学級づくりに関わる際にも、こうした「目的をもった楽しい活動」を取り入れ、生徒同士が自然に関わり合い、意見を尊重し合える雰囲気づくりを大切にしたい。(大学院M1)

正解のない問題にみんなで意見を出し合う楽しさを感じました。どの人も自分の考えを正解を、みんなにわかるように一生懸命説明していること、自分の考えもありつつ、人の考えも尊重しようとする姿が交差し、初め集うメンバーとでも、他者と協働するチームがすぐには上がると感じた。(特別支援学校教諭)

研修びらきを受けて、皆に何かしらの答えがあることばかりではないということ改めて感じた。問い次第で子どもの学びの中身が変わってくることを改めて感じた。だからこそ、子どもたちに投げかける問いが大事である。(中学校教諭)

私自身アドバンスの方からの参加なので、いつも同じ雰囲気での研修であると感じてきた。しかし、今回から後大学院生より若い学生が入ってくることで、新しいアイデアも付加わり、よい流れになったと感じた。また、私自身も教育者としていないので、教育学部の学生から出る話や現場の先生方からのお話になることばかりで、とても有意義な時間になった。(大学院M1)

学級生が参加していたことにより、「自分が他校の出身ということばかりで教育者ならではのつながりの広さを感じることができた」目であった。また、同校の学部4年生は、学部2年生の頃から参加しているとのこと聞き、驚いた。院生だけでなく、こうして出会うことのできた学部生とも高い思い、資質向上に努めたいと考えている。(大学院M1)

講義・演習

★テーマ：集団・学級づくりの面白さと 教員としての関わり
香川大学大学院教育学研究科 准教授 大西 美輪 さん

図 第1回通信から抜粋

3) 成果と今後の課題

学生の登録は、教育学部の学生の登録数が例年よりも少なかった。登録学生の振り返りの記述にも、「同級生とコーホートの話をすると、その存在を知らない人が多いので、大学でもっとコーホートのアピールができてきたと良いと感じました。大学生ももっと参加できると、話がもっと盛り上がるのではないかと感じています。」とある。そのため、来年度は登録経験学生から学生に向けての周知の機会をつくる等、周知の方法を複数に増やしたり、山口県公立学校教員採用候補者選考試験の実施日の変更に合わせて登録開始時期を変えたりする等して、より多くの学生に学びの機会を提供していきたい。若手教員の登録は、学生時代にも登録していた卒業生・修了生を中心としているが、Advanced coursed登録のミドルリーダーや管理職の紹介により、学びの場を求めて登録したという若手教員もいた。今後も、より多くの若手教員が登録・参加しやすい流れを生み出したい。

最後に、本プログラムの連携先である山口県教育委員会、山口市教育委員会、並びに本プログラムに関わってくださった関係者の方々に心より感謝いたします。

(執筆担当教員：藤上 真弓)

(プログラムスタッフ：藤上 真弓、霜川 正幸、伊藤ひとみ、河村 直子、久保田尚子、久保田 舞、小杉 進二、坂本 哲彦、佐々 廣子、佐々木 司、佐野 崇幸、静屋 智、鷹岡 亮、田島 大輔、時乗順一郎、長砂 志保、中田 充、中村 正則、廣口 知世、藤井 志保、松田 靖、柳井 崇史、和泉 研二)

8. ちゃぶ台次世代コーホート Advanced Course

1) 活動の趣旨(目的)

平成26年に立ち上げた、経験3～20年頃の教員による自主的・自発的研修組織「ちゃぶ台次世代コーホート advanced course」に集う県内外の教員たちは、今日も(今回も)大学教職員、県・市教委指導者や地域の教育関係者等と協働しながらミドルリーダーとしての資質能力を高め、学校や行政の最前線で輝き続けている。本プログラムでは、本年度も6月より計10回に及ぶ研修プログラムを通年・積み上げ式で行い、若手教員として積み重ねてきた個々の教育実践、成果や課題の開示・共有と省察、教え合い・学び合いや大学教員等と協働した課題研修等をとおして、これからの学校や分掌の経営・運営を中核的に担うリーダーとしての資質能力の深化、教職実践課題の解決力、省察力や探究・研究力の醸成に努めている。



2) 令和7年度の活動概要

(1) 研修プログラムの受講生と運営の実際

プログラムは会員登録(随時登録可能)による研修参加を基本とし、本年度は公募により参加する現職教員28人、教職大学院に在籍する現職教員16人、教職大学院生14人、県教委とやまぐち総合教育支援センターの指導主事3人、県内市教委の指導主事4人、本学教職員22人の計87人が登録・参加している。教職大学院生(現職教員・学部卒院生)は、志を同じくする教職仲間(co-fort)との切磋琢磨や未来志向の中で、それぞれがテーマを設定し学ぶとともに、教職員研修の開発・運営に関する力量形成を目的に「講座運営チーム」として活動している。

(2) 研修行事の実際

第1回から第10回までの日程、テーマ等を以下に示す。

第1回 令和7年6月14日(土) 13:00～17:00 場所: 山口大学

テーマ ①山口県教育の重点と予算 ②山口県の地域連携教育の現状と課題
 講師 ①山口県教育庁教育政策課 班長 ②山口県教育庁地域連携教育推進課 班長
 参加者 教員22人、教職大学院生13人、講師・大学関係者24人 計59人

第2回 令和7年8月30日(土) 13:00~17:00 場所:山口大学

テーマ ①教員人材(初任者、若手教員)の育成
 講師 ①岐阜県大垣市立興文中学校 校長(前 岐阜大学教職大学院 准教授)
 参加者 教員22人、教職大学院生12人、講師・大学関係者17人 計51人

第3回 令和7年10月4日(土) 9:30~12:30 場所:山口大学

テーマ ①道徳教育の推進とミドルリーダーの在り方
 講師 ①香川大学教職大学院 教授
 参加者 教員19人、教職大学院生12人、講師・大学関係者12人 計43人

第4回 令和7年10月4日(土) 12:30~17:00 場所:山口大学

テーマ ①コーホート研修びらき ②集団・学級づくりと教員の関わり
 講師 ①山口大学プログラムスタッフ ②香川大学教職大学院 准教授
 参加者 教員15人、教職大学院生・学部生18人、講師・大学関係者16人 計49人

第5・6回 令和7年11月30日(日) 9:00~16:30 場所:山口大学

テーマ ①会員による研究・実践発表 ②いのちのミュージアム in 山口大学
 発表者 ①ちゃぶ台次世代コーホート会員(現職教員) ②グリーンサポートやまぐち 代表
 参加者 295人 「山口大教育フェス」への参画・合同企画

第7回 令和7年12月27日(土) 9:30~12:30 場所:セントコア山口

テーマ ①学校法務 教育現場と法の支配
 講師 ①山口県弁護士会 弁護士
 参加者 教員26人、教職大学院生・学部生19人、講師・大学関係者18人 計63人

第8回 令和7年12月27日(土) 12:30~17:00 場所:セントコア山口

テーマ ①保護者交流会、理想の教師像の共有
 講師 ①保護者(山口県PTA連合会役員)
 参加者 教員22人、教職大学院生・学部生17人、講師・大学関係者27人 計66人

※第7・8回は、(独)教職員支援機構(NITS)事業(NITS・教職大学院・教育委員会コラボ研修)の一つとして、「NITS-Café」として実施したものである。

第9回 令和8年3月14日(土) 10:30~12:00 場所:山口大学

テーマ ①研修の振り返りと教員としての成長
 参加者 教員20人、教職大学院生・学部生15人、講師・大学関係者10人 計45人

第10回 令和8年3月14日(土) 13:00~17:00 場所:山口大学

テーマ ①研修の振り返り ②これからの教員への教育長としての期待

講師 ①山口大学プログラムスタッフ ②萩市教育委員会 教育長

参加者 教員25人、教職大学院生・学部生15人、講師・大学関係者10人 計50人

(3)「ちゃぶ台」や「Café」形式の研修スタイルに対する受講生の声(振り返りシートより)

「円卓で語り合う形式は、心理的安全性を高め、率直な意見交換を促進する効果が高い。研修というよりも対話の場として設計されていたことで、参加者同士の関係性構築にも寄与したと感じている。」

「この形式の研修は、参加者一人ひとりが安心して意見を述べ、互いの考えに耳を傾けながら学びを深めていける。有効な研修方法の一つである。講義型の研修では得にくい、価値観の共有や内省の深まりが自然に生まれ、教職員自身が「考える主体」として研修に関わることができる点に魅力がある。また、立場や教職経験の異なる参加者が同じテーマについて語り合うことで、自身の考えを見つめ直し、視野を広げる機会ともなる。こうした対話の積み重ねがチーム学校としての共通理解を育てていくと考え、校内研修に採り入れていきたい。」

「学生、現職教員等といった立場の異なる参加者が、一つのテーマについて同じ円卓を囲み語り合える場は大変ありがたく、自身の実践や教員としての在り方を静かに省みる機会となった。フラットな対話は教職員研修において欠かせない要素である。対話を通して学び合うこの場の価値を改めて実感するとともに、学校現場における研修の在り方を考える上でも大きな示唆を得た。」



3) 今後の課題

プログラムに対する関心意欲、参画姿勢や成果還元の一層の向上や拡大をめざし、研修回数や日程・時程の検討、カリキュラムの精選、指導者の組織内確保や育成等の工夫改善に努めるとともに、研修観の転換と参加者の能動的参画の促進等をととした「自律的学び手」の育成を進めていく。

(霜川 正幸、藤上 真弓、伊藤ひとみ、河村 直子、久保田尚子、久保田 舞、小杉 進二、坂本 哲彦、佐々 廣子、佐々木 司、佐野 崇幸、静屋 智、鷹岡 亮、田島 大輔、時乗順一郎、長砂 志保、中田 充、中村 正則、廣口 知世、藤井 志保、松田 靖、柳井 崇史、和泉 研二)

9. ちゃぶ台理科ネット

1) 活動の趣旨(目的)

子どもたちの理科の学力や考える力を伸ばすためには、何よりも子どもたちが理科を好きになることが重要であり、そのポイントは、理科が好きで理科教育に熱心に取組める教員を育成することであると考えます。本プログラムは、大学、学校現場、教育委員会、やまぐち総合教育支援センター等の中で緊密なネットワークを構築し、理科教育に携わる人々が互いに連携し協力しながら、教員志望学生や理科教育を担う教員の資質・能力を向上させ、理科教育の充実を図るものである。

2) 令和7年度の計画

本年度は、学生の主体的な学びが実現できるように意識しながら、3つの事業を実施した。

- (A) 研修会・座談会：広い視野から理科教育の現状や課題を理解し、見識を深める。
- (B) 参加型実践演習：各種イベントにおいて、自ら企画した理科実験を実施し、実践力を養う。
- (C) 施設見学研修・学習会：学校教育以外の理科関係の教育・啓蒙活動を理解し見聞を広める。

3) 活動の実際

(A) 研修会・座談会(ちゃぶ台理科ネット公開講座)

(A1) 現在のエネルギー政策には、次世代の電力を担う技術革新によって電力需要の拡大に対応しつつ、カーボンニュートラル社会を見据えた施策を推進することが求められている。教育現場においても、こうした動向を踏まえたエネルギー・環境学習を行い、地球規模の諸問題を「主体的な課題」として再定義する機会の提供が肝要である。このような背景から、経済産業省資源エネルギー庁より須山照子氏を招聘し、エネルギー政策の現状に関する講義、および次世代エネルギー教育に資するワークショップを実施した。本講座が受講者の専門性を高め、ひいては教育現場における子どもたちへの教育的還元につながることを期待したい。

日時：2025年12月23日(火) 10:20~12:20

会場：山口大学 教育学部A棟301号室

講義：経済産業省資源エネルギー庁 須山照子氏 「エネルギー政策の現状と今後」

ワークショップ：「ボードゲーム(ブルー・ファウンダース 青色の地球を目指して)」

参加者：大学生14名および大学教員1名



図1 講座の様子

(A2) 「科学教育実践研究会やまぐち」への参加

小学校教員の研修会「科学教育実践研究会やまぐち」(会長：光市立大和小学校の吉田哲朗校長)が2025年4月26日、6月21日、12月6日に開催された。この研修会に「理科ちゃぶ」として小学校総合選修の学生および大学教員が参加した。

4月26日の研修会の参加者は、教職員23名、学生2名、大学教員1名であり、6月21日の研修会の参加者は教職員17名、学生8名、大学教員1名であり、12月6日の研修会の参加者は教職員18名、学生3名、大学教員1名であった。

12月6日の研修会では学生3名が、SSTAの「GEMBAに行こう！」に選ばれ、参加した研究大会「子ども科学教育研究全国大会in富山」(開催校:射水市立片口小学校, 開催日:2025年11月8日)について報告を行い、質疑応答を行った。

図2～図4は4月26日、6月21日、12月6日の研修会の様子である。



図2 4月26日の研修会



図3 6月21日の研修会



図4 12月6日の研修会

(A3)「日本理科教育学会中国支部大会(山口大会)」への学生参加*

(* 令和6年度実施だが、令和6年度に報告していなかったため、令和7年度報告書にて報告する。)

2024年12月14日(土)に山口大学にて日本理科教育学会中国支部大会(山口大会)が開催された。この学会に「理科ちゃぶ」として小学校総合選修の学部学生38名と理科教育教室の学生3名が参加した。その中で、理科教育教室の学生1名が研究発表を行った。図5と図6は中国支部大会の学生の様子である。



図5 中国支部大会の学生の様子



図6 中国支部大会の学生の様子

(B) 参加型実践演習

「サイエンスワールド2025 ～キミの「なぜ？」が世界を変える！科学大冒険！」での学び

第25回目となるサイエンスワールドとして、「サイエンスワールド2025 ～キミの『なぜ?』が世界を変える！科学大冒険!～」(主催:山口大学理学部、協力:教育学部理科教育講座)を開催した。幼稚園児から小・中学生を主な対象として、自然科学の魅力を体験的に伝えることを目的とした科学イベントである。本企画では、大学生が主体となり実験ブースの企画・準備を行い、来場した子どもたちに身の回りにある科学現象への体験と分かりやすい説明を心がけることで、幼稚園、小・中学生のみならず、保護者にとっても、先端自然科学を身近に感じられる場となっている。

本イベントは毎年、秋に開催され、大学の第二食堂「きらら」をメイン会場として、FAVOや理学部など学内の複数会場において、学生が工夫を凝らした展示や実演を行う科学教室ブースを設置している。それぞれのブースでは、各分野の専門性を生かしつつ、子どもたちが興味をもって参加できる内容が提供され、全体として充実した科学イベントとなった。また、複数のブースを体験する「きらら内わくわく体験ツアー」などの特別企画も実施され、理学部の数学、物理・情報、化学、生物、地球科学の各分野を学ぶ学生が参加した。教育学部からは、理科教育選修の1～3年生19名(1年11名、2年3名、3年5名)が2つの体験型ブースを立ち上

げて参加し、会場は多くの子どもたちで賑わい、例年以上に活気あふれるサイエンスワールドとなった。

1つ目のブース「自分専用のホバークラフトを作ろう!!」では、空気のかや小さな摩擦によるすべるような物体の動きを、簡易的な教材を用いて体験的に学ぶ活動が行われた。子どもたちは自分で装置を作り、実際に動かす中で、目に見えない空気の働きによって物体の動きが大きく変わることを実感していた。ホバークラフトがすべるように動いた瞬間には、驚きや喜びの声が多く聞かれ、「どうして浮くのか」「もっと速く動かしたい」といった素直な疑問が自然に生まれていた。学生は、それらの疑問に対して専門的になりすぎない言葉を選びながら説明することを心がけ、子どもたちの学習段階や反応を見ながら伝える工夫していた。この経験を通して、子どもの興味や関心を起点とした言葉かけや、主体的に取り組む姿勢を引き出すことの重要性を実感していた。

2つ目のブース「ドロドロカチカチ 不思議な感触体!」では、ダイラタンシーという非ニュートン流体の性質をテーマに、触覚を通して物質の特徴を体験する実験を行った。ゆっくり触ると液体のように流れ、強く押すと固体のように感じられる不思議な感触に、子どもたちは強い興味を示していた。「触り方で変わるのが不思議」「力を入れると固くなる」といった率直な感想が多く聞かれ、体験を通して現象を捉えることの有効性を実感している様子が見られた。学生にとっても、言葉による説明だけでなく、実際の体験を通して理解を促すことが、理科教育において非常に重要であることを学ぶ機会となった。

両ブースを通じて特に印象に残ったのは、子どもたちの素直な反応や喜びに直接触れられたことである。実験が成功したときの笑顔や、「楽しかった」「また来たい」といった言葉は、学生にとって大きな達成感につながっていた。一方で、同じ説明であっても子どもによって理解の度合いが異なることや、予想外の質問を受ける場面も多く、柔軟に対応することの難しさも実感しているようであった。これらの経験は、将来教員として子ども一人ひとりに向き合う際に必要となる姿勢や力について考える貴重な機会となったと思われる。

準備にあたり、教育学部の教員による事前講義として、科学イベントを実施する際の心構えや注意点、考慮すべき事項についての指導を行った。また、本イベントでは課題解決型の能動的学習(アクティブ・ラーニング)を取り入れ、ブースの企画・計画・準備・実施のすべてを大学生が主体的に行った。その結果、学生たちは企画力や科学的理解、問題解決能力に加え、子どもたちに分かりやすく伝える力やコミュニケーション能力など、教員として求められる多様な資質・能力を総合的に高めることができた。さらに、教育学部と理学部の学生が協力して活動することで、学部を超えた連携の重要性を実感する貴重な機会ともなった。未就学児から中学生までの幅広い年齢層の子どもたちは、体験を通して科学への探究心を育み、学生自身も子どもたちと多く触れ合い、ともに驚き、学び、喜びを共有する中で、教員を目指す上での大きな学びを得ることができた。

今後も子どもたちと科学を通じて交流できる場を継続的に確保し、体験型学習をさらに発展させるとともに、学生の成長の機会として、より充実した「ちゃぶ台企画」を展開していきたい。

会場：山口大学第二食堂(きらら)、教育学部参加者：大学生(19名)、大学教員(1名)

日時：2025年11月9日(日)9時～16時



図7 教育学部屋外ブースの様子

(C) 施設見学研修・学習会(課外活動)

(A) で報告した公開講座での知識習得に加え、学外でのエネルギー関連施設見学研修会を開催した。施設での実地体験と専門職員による解説を通じ、より実践的な理解の深化を図った。あわせて、2026年3月7日に新潟薬科大学で開催された文部科学省「STEAM教育手法を活用した原子力人材育成」事業の総合討論会に参加し、学生2名がエネルギー・環境に関する成果発表を行った。

- ・ 島根原子力発電所（島根県松江市）・南原水力発電所（広島県広島市）見学研修会
2025年8月7日（木）－8月8日（金） 県内小中高等学校教員等 計15名
- ・ 松川地熱発電所（岩手県八幡平市）・日本アイソトープ協会滝沢研究所（岩手県滝沢市）見学研修及び勉強会
2025年9月21日（日）－22日（月） 理科教育、家政教育の学生計2名、教員1名
- ・ 北九州市科学館スペースLABO・ひびきエル・エヌ・ジー（株）（共に福岡県北九州市）見学研修会
2025年9月24日（水） 理科教育、家政教育、特別支援教育、教職大学院、国際総合科学部、ひと・まち未来共創学環の学生及び教員 計19名
- ・ 東電柏崎刈羽原子力発電所（新潟県柏崎市）見学研修及び総合討論会（新潟薬科大学）
2026年3月6日（金）－7日（日） 理科教育の学生2名、教員1名
- ・ 島根原子力発電所（島根県松江市）・南原水力発電所（広島県広島市）見学研修会
2025年3月12日（木）－13日（金） 理科教育、社会科教育、小学校総合、教職大学院の学生 計20名、教員1名



図8 見学研修会の様子

エネルギー・環境問題への関心の高まりにより、懸案であった参加学生の固定化が解消され、理系以外の学生も積極的に各企画へ参加するようになった。これは、文理を問わず総合的な探究力や創造力を養うというSTEAM教育の理念に合致する成果である。今後は、この多様性を維持しつつ、さらなる参加層の拡大と教育効果の質的向上に努めたい。

4) 成果と課題

令和7年度も、学生が実践的な学びと理論的な学びを体験する多様な機会を提供することができた。学校現場においては、探究的な活動がますます重視されているなど、与えられた情報を論理的に考察して自分の考えをまとめる力や自ら課題を発見して解決に導く力、自分の興味関心に基づいて積極的に学習に取り組む姿勢など、教師が備えるべき資質能力はますます高度で多様になってきている。「理科ちゃぶ」の活動が、これからの教員に求められる資質能力向上の一助となるよう、次年度以降もさらに充実した活動となるよう努めていきたい。

(執筆担当：和泉 研二、重松 宏武、柴田 勝、佐伯 英人)

10. ICTサポーター

1) 活動の趣旨(目的)

本プログラムは、教職課程に所属する学生のICTに関する指導力向上や情報教育に関する学習支援のスキルを向上させることを目的に実施している。具体的な活動内容は、山口県教育委員会と連携して情報モラル教育の実践を試みる「インターネットセイフティセミナー」と、山口市教育委員会と連携してGIGAスクールのサポートを実施する「ICTサポーター」活動である。インターネットセイフティセミナーは大学生（大学院生）が身近に起こりうる情報社会のトラブルを、判りやすく教材化し、高校生に対して出前授業形式で説明するものである。また、ICTサポーターは山口市教育委員会と山口市公立中学校との協議のうえで実施することができた。

2) 令和7年度の活動概要

(1) インターネットセイフティセミナー

年度当初に山口県教育委員会よりセミナー開催希望の調査が行われ、令和7年度は6校の申込がありすべての学校で開催されることとなった。セミナーの内容については、山口県教育委員会の担当者を介して開催を希望する学校と調整し、教材制作を行った。

また、セミナーについては学生が教材制作を含めて主体的に取り組み、学校の実態に合わせた事例を盛り込んだ。

	場所	実施日	対象者数	参加学生数
第1回	山口県立下松高等学校	令和7年 9月18日(木)	146名	2名
第2回	山口県立岩国工業高等学校	令和7年10月10日(金)	450名	2名
第3回	山口県立下関西高等学校	令和7年11月18日(火)	230名	1名
第4回	山口県立岩国商業高等学校東分校(昼間部)	令和7年12月15日(月)	77名	1名
第5回	山口県立岩国商業高等学校東分校(夜間部)	令和7年12月15日(月)	40名	1名
第6回	山口県立田布施農業高等学校	令和7年12月16日(火)	317名	1名

(2) GIGAスクールサポーター

ICTを活用した学習指導を効果的に行う支援のための知識や技能を身に着けた人材(学生)を育成し、連携する学校に派遣することを目的に設置したICTサポーターである。今年度は山口市立平川中学校で実施することができた。山口市教育委員会の指導主事による研修を経て、学校での活動を実施した。今年度に新たに取り組んだ授業支援を含んだ主な活動は下記のとおりである。

- 機器・システムの管理の支援
- 教材開発や教材研究の支援
- 授業支援
- ICTを活用した課外活動や委員会活動の支援
- 校務支援



図1 活動の様子

3) 今後の課題

インターネットセイフティセミナーについては、生成AIに関する内容など先進的なものや闇バイト募集やSNSに関するプライバシーの影響など大学生の目線で企画した教材を取り入れることができた。変化が著しい情報社会で安心して生活するための教材開発を継続して行う必要があると考えられる。

ICTサポーターについては、デバイスの管理など学校の課題に対応することができたが、関係機関との引継や調整などが継続的な課題であると考えられる。

今年度は、年度当初の登録者数が少なく、学年の偏りもあったため参加を呼び掛ける広報を工夫する必要があると思われる。来年度以降は、ポスターなど掲示だけでなく説明会などより能動的な取り組みを実施したいと考えている。

(担当 阿濱 茂樹、中田 充、鷹岡 亮)

11. まなびのつながりプロジェクト

1) 活動の趣旨(目的)

「まなびのつながりプロジェクト(まなプロ)」は、中学生や高校生が大学生とともに“未体験”を楽しみ、仲間づくりをとおして、人と人との“つながり”が結ばれることを目的とする企画である。

2023年度の試行実施を経て、2024年5月より、ちゃぶ台プログラムに位置付けられた。

(1) 夏のまなびのつながりプロジェクト(2025年8月25日)

「夏のまなびのつながりプロジェクト(夏プロ)」は、山口県立山口中央高等学校バレーボール部との共同開催で、山口大学で行った。今回の夏プロのねらいは、①まなプロチーム内の仲を深めること、②高校生との交流をすることである。最初に、山口中央高校バレー部が普段行っている準備運動を全員で行った。前半は、まなプロチームvs山口中央高校バレー部、後半は、交流戦の2パターンの試合を行った。前半では、若さとエネルギーをもった高校生が大学生に圧勝する結果となったが、お互い本気でバレーボールをすることができた。後半では、大学生も高校生も一緒に盛り上がり、全員で繋ぐバレーを楽しんだ。夏プロのねらいを達成することができ、次回以降に繋がる夏プロとなった。

(2) 冬のまなびのつながりプロジェクト(2025年12月20日)

「冬のまなびのつながりプロジェクト」は、初の中中学生対象企画を実施した。「大学生の1日を中学生に体験してもらう」ことをねらいとして、アイスブレイクに始まり、講義体験や学食体験、座談会を行った。大学ならではの「履修登録」の後、参加者は、岡村吉永教授、鷹岡亮教授、沖林洋平准教授とゼミ生5名による授業を受講した。初めての中学生対象企画にもかかわらず、12名の中学生に来学いただき、新たなつながりをたくさん結ぶことができた。活動を終えた中学生の感想には、「大学生は、単位やバイトに追われているイメージだったけど、大学ってこんなに楽しいところなのかと思った」「キャンパスライフは意外と自由」などと、一日の体験を通して大学のイメージが変化したことが読み取れるものが多くみられた。

(3) 春のまなびのつながりプロジェクト(2026年3月25日)

「春のまなびのつながりプロジェクト」は山口県立柳井高校、山口県立山口中央高校との共同開催で約半年間の熟議による企画を実施予定である。

2) 課題と展望

まなびのつながりプロジェクトは、第1回の活動(2024年1月)から2年が経過した。学生主体の進路探究活動として、この間、県内の高等学校2校と連携し、対象を高校生から中学生へと拡げながら活動を展開することができた。今後の課題として、活動の効果検証の必要と組織の継承があげられる。

3) 資料等

- ・学生が企画・制作した募集要項
- ・活動の様子(2025.12.10 講義体験・活動後の集合写真)

まなびのつながりプロジェクト

9時〜16時20分 (土) 12月20日

君は大学生になれる

未来を見つける一日の冒険。

会場：山口大学 吉田キャンパス
対象：山口市・防府市の中学生 (定員：50名)

申し込みはこちら！

事前申し込み制

質問フォーム



春のつながりプロジェクト

『大学ってもっと近い』

柳井高校×中央高校×山口大学

3/25(水)

10:00~17:00

柳井高校発：8:30予定
柳井高校着：18:30予定

送迎バスが出ます！
柳井高校や山口大学

場所：山口大学 吉田キャンパス

主催：山口大学教育学部ちゃぶ台プログラム
まなびのつながりプロジェクト

参加対象者
柳井高校生、山口中央高校生
3年生は進路決定者のみ参加可能

持ち物
筆記用具、太めのペン、バインダー、
昼食代(学生食堂で昼食をとります)、
飲み物、傘(雨天の場合)

服装
ジャージ等

主な内容
☆MBA(ミッション・ビンゴ・アドベンチャー)
山口中央高校生徒会執行部考案！
☆クイズバトル
柳井高校生の有志メンバー考案！
☆Talking work shop
進路や勉強、大学について、悩みや疑問を
語り合おう！

事前申込制
申し込み締め切り：3/4(水)
参加を希望する方は、以下のQRコードを読み取り
Google formsに回答をお願いします

参加フォーム

まなプロのInstagramです
チェックしてみてください！

春のまなびのつながりプロジェクト

『大学って、もっと近い』

3/25

10:00~17:00

場所：山口大学 吉田キャンパス

主催：山口大学教育学部ちゃぶ台プログラム
「まなびのつながりプロジェクト」

主な企画

- ★MBA (ミッション・ビンゴ・アドベンチャー)
山口中央高校生徒会執行部の考案企画！
- ★クイズバトル
柳井高校生から有志で募ったメンバーの考案企画！
- ★Talking work shop
進路や勉強、山口大学についてなど、
悩みや疑問を大学生と高校生で語り合おう！

募集要項

- 山口中央高校と柳井高校の1,2年生
※3年生は進路決定者のみ参加可能。
※学生食堂で昼食をとるため、昼食代を持参していただきます。

詳しい情報は
こちら↓

参加申し込みは
こちら↓

申し込み締め切り：3月4日

(担当教員 生鳥亜樹子)

12. 幼大連携ボランティア

1) 活動の趣旨(目的)

本プログラム「幼大連携ボランティア」は、小学校等の教員を目指す大学生を対象として、幼児と一緒ににごっこを楽しむことを通して、幼児の発育発達についての理解を促すことを目的としている。また、文部科学省が推進してきた幼保小の架け橋プログラムをはじめとする幼保小連携の重要性を鑑み、幼児や幼児と関わる教職員の方々との対話を通して、幼児教育の特性についての理解を促すことも期待している。

2) 活動の概要(実績)

場 所: 認定こども園ひらかわ(山口大学教育学部から徒歩圏内)の園庭

期 間: 2025年11月 6日(①9:00~10:00(5歳児)、②10:00~11:00(4歳児)、③適宜座談会)
 2025年11月13日(①9:00~10:00(5歳児)、②10:00~11:00(4歳児)、③適宜座談会)
 2025年11月20日(①9:00~10:00(5歳児)、②10:00~11:00(4歳児)、③適宜座談会)

対 象 者: 山口大学教育学部の大学生9名(小学校教員志望8名; 中学校教員志望1名)

活動内容: 認定こども園ひらかわに通う幼児(4歳児(在籍29名)と5歳児(在籍28名))と一緒に対象者である大学生がチームを作り、しっぽとりおにごっこ(図1「しっぽとりおにごっこ(上級者向け: 5歳児対象)」及び図2「しっぽとりおにごっこ(初心者向け: 4歳児対象)」を参照)を楽しんだ。また、各回しっぽとりおにごっこ終了後に、園の教職員の方々、大学生、大学教員と一緒にちゃぶ台を囲みながら座談会を行った。具体的には、幼児との関わりについての気づきの共有や、共有を踏まえたフィードバックを園の教職員の方々からいただいた。活動内容の概要を表1に示す。

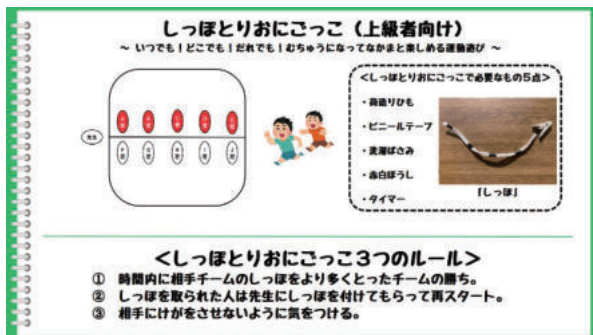


図1「しっぽとり鬼ごっこ(上級者向け: 5歳児対象)」

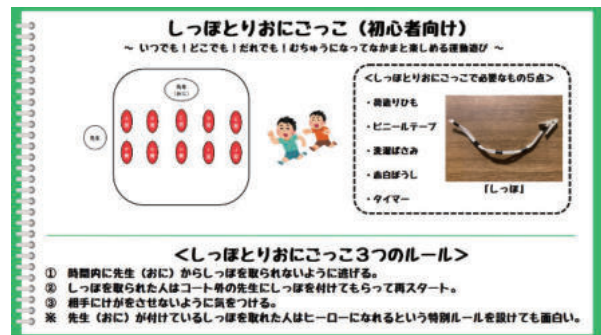


図2「しっぽとり鬼ごっこ(初心者向け: 4歳児対象)」

表1「活動内容の概要」

5歳児の活動内容の概要	4歳児の活動内容の概要
①コートや道具の準備	①コートや道具の準備
②子どもたちと挨拶&自己紹介&アイスブレイク	②子どもたちと挨拶&自己紹介&アイスブレイク
③2チームずつ大学生から取ったしっぽを着用する	③2チームずつ大学生から取ったしっぽを着用する
④しっぽとりおにごっこ(上級編)のルール確認	④しっぽとりおにごっこ(初級編)のルール確認
⑤大学生がチームに入り、しっぽとりおにごっこ体験(各チーム円になって、作戦会議の時間を設ける)	⑤大学生が鬼役になり、しっぽとりおにごっこ体験(各チーム円になって、作戦会議の時間を設ける)
⑥挨拶をして終了	⑥挨拶をして終了
⑦ちゃぶ台を囲んでの座談会	⑦ちゃぶ台を囲んでの座談会

3) 成果と課題

しっぽとりおにごっこと作戦会議の様子をそれぞれ写真1と写真2に示す。



写真1「しっぽとりおにごっこの様子」



写真2「作戦会議の様子」

本活動の趣旨（目的）を踏まえた成果を反映していると示唆される学生の声を以下に紹介する。

本活動に参加し、幼児の発達段階について多くの気づきを得ることができました。4歳児と5歳児とでは成長の度合いに明確な違いがあり、遊び一つとっても工夫が必要であると感じました。実際に、その年齢に応じたルールを設定しておにごっこを行いました。同じ説明でも理解度には差があり、発達段階に応じた指導の大切さを実感しました。これは小学校教育にも共通する点であり、今後も年齢に応じた指導方法やルール設定について学びを深めていきたいと感じました。また、ただのおにごっこでも、怪我につながる要因が多く潜んでいることが分かりました。逃げることに夢中になった幼児は周囲が見えなくなり、他の子どもとぶつかってしまう危険が高まります。そのため、「前をよく見てね」といった声かけを行い、幼児自身が周囲に注意を向けられるように支援することが大切だと学びました。どんな活動であっても、常に子どもの安全を第一に考え、事前の準備や適切な声かけを意識して取り組んでいきたいと思えます。

（小学校総合選修4年）

運動が得意でない子がヒーロー（鬼である大学生がつけている「ヒーローになれるしっぽ」を取った逃げる側の子ども）になった場面がありました。ヒーローになれるしっぽを取った瞬間のその子の嬉しそうな目の輝きに心惹かれました。きっとその子にとっては大きなチャレンジで、大きな成功体験だったと思います。こうした運動での成功体験が運動好きにし、これから体力をつけていってくれば、この活動を行った意義は大きいと思います。体調不良で1回休んだことが悔やまれるほどとても楽しく幸せな時間でした。

（小学校総合選修4年）

幼児と本気で遊ぶことが出来て楽しかったです。作戦会議では、良い作戦を思いついている子がいましたが、なかなか他の人に伝えることが難しかったので、話し合いの難しさを体感しました。特に伝える側ではなく、聞く側がすぐに自分の話をしてしまったり、他の話に脱線してしまったりするところが難しいなと思いました。幼児でも自分で作戦を考えることができることに驚きました。

（小学校総合選修3年）

関わりの少ない幼児と深く関わることで、発達段階や幼児教育の特性について学ぶことができました。例えば小学校では怒られてしまうような行動も、幼児にとっては全てが新鮮で、学んでいく過程で必要な行動なのだと思えることができました。本活動の経験を、幼保小連携を進める上で活かしていきたいです。

（小学校総合選修4年）

学生の声を概観すると、対象者である大学生が幼児と本気になってしっぽとりおにごっこに取り組んだことを通して、本活動の趣旨（目的）である幼児の発育発達に関する理解が促されたことが伺えた。また、しっ

ぼとりおにごっこ終了後のちゃぶ台を囲んでの座談会の際に、園の教職員の方々からいただいた幼児教育で大切にしている事柄を踏まえたフィードバックをいただいたことを通して、幼児教育の特性や幼保小連携の意義についての理解が深まったことが示唆された。

本年度の活動は、日程調整の関係により合計で3回の活動頻度となった。しっぼとりおにごっこを体験した4歳児と5歳児の子どもたちからはもっと一緒に大学生としっぼとりおにごっこをしたいとの声が多くあった。次年度以降は、より活動期間を増やしていきたいと考えている。

4) おわりに

本活動の実施にあたり、認定こども園ひらかわの教職員の皆様や幼児のみなさんには大変お世話になりました。本学の学生に大きな学びを与えていただきましてどうもありがとうございました。

(執筆担当者：青山 翔)

13. あすなるボランティア

1) 活動の趣旨(目的)

あすなるボランティアは、山口市教育支援センター「あすなる第2教室」(以下、「あすなる」)に学生が出向き、不登校傾向等の児童生徒と交流し、教室の先生方が企画された活動に参加したり、学生たちが企画・準備した活動を実施することを通して、児童生徒が多様な人と関わる機会を作ることを目的としている。また同時に、教員や心理職を目指す学生たちが、不登校傾向等の児童生徒や、あすなる第2教室の先生方の児童生徒との関わりを目の当たりにすることで、体験的に不登校傾向等の児童生徒理解や、関わりの学びになることも目的としている。このボランティアを通し、大学の講義では得られない体験的な学びを得ることが期待される。

なお、あすなるボランティアは、山口市教育委員会と連携し、「山口市フューチャールーム事業」の一環として行われているプログラムでもある。

2) 令和7年度の活動概要

あすなるでのボランティアは、令和6年度から行っているが、ちゃぶ台プログラムとなったのは、令和7年11月からである。年度初めに教員が参加者を募っている。参加希望の学生はあすなるの先生と連絡を取り合い、週1回程度、あすなるに出向いている。また、学生があすなるでの活動の計画・準備を行い、活動を実施する場合もある。その他、月に1回程度、大学において大学教員と共に活動の振り返りを行っている。

R7年度は4名の学生(4年生1名、3年生1名、2年生2名)が参加した。あすなる第2教室でのボランティアは延べ19名である。

表1. 令和7年度あすなるボランティア活動

実施日(参加学生数)	場 所	内 容
令和7年11月27日(木) (3人)	あすなる	・児童生徒への補助と制作 ①ガーランド作り
令和7年12月10日(水) (4人)	教育学部	・活動振り返り
令和7年12月27日(木) (3人)	あすなる	・学生が活動を計画・運営 ①モルック
令和8年 1月15日(木) (4人)	あすなる	・学生が活動を計画・運営 ①心合わせようチャレンジ ②アキネーターゲーム ③ジェスチャーゲーム ④ito ⑤新聞じゃんけん
令和8年 1月21日(水) (2人)	教育学部	・活動振り返り
令和8年 1月22日(木) (2人)	あすなる	・児童生徒への補助と制作 ①フラワーアレンジメント
令和8年 1月29日(木) (2人)	あすなる	・児童生徒への補助と制作 ①オリジナル凧づくりと河川敷で凧あげ
令和8年 2月 5日(木) (4人)	あすなる	・学生が活動を計画・運営 ①9マスビンゴ ②9マス鬼ごっこ ③室内モルック ④言うこと一緒やること逆ゲーム
令和8年 2月12日(木) (1人)	あすなる	・児童生徒への補助と制作 ①卓球バレー ②室内モルック ③ラダーゲッター

3) 学生の振り返り

4年生学生「昨年に引き続き、ボランティアに参加させていただきました。今年は主にレクリエーションの企画をしました。児童観を大切にしながら、子どもたちがどのようにすれば楽しめるかを考えて活動しました。その結果、子どもたちとの関わりがより深まっただけでなく、楽しみながら活動できるレクリエーションの引き出しのバリエーションも増え、良い経験になりました。」

3年生学生「昨年度に引き続き、あすなろボランティアに参加させていただいた。ボランティアの人数が増えたことで、子ども達との関わり方が多様になり、今まで知らなかった子ども達の側面を知ることができた。また、あすなろ教室の先生方から活動の手伝いを任せられることが増え、大学生企画では仲間と協力しながら企画を考え、実施し、子ども達から楽しいと感想を聞くことができた。大変だがやりがいを感じるが多かった。」

2年生学生「あすなろボランティアを通して実際の小学生と関わることができ、実態やコミュニケーション方法について学ぶことができた。企画などに参加する中で、あすなろにいる子どもたちにどのような配慮が必要なのかや、どんなことを楽しんで取り組んでくれるのかというところを知ることができ、とても良い経験になった。」

2年生学生「あすなろボランティアに参加して、子どもとの多様な関わり方を学んだ。積極的に関わるべきか、時間をかけて関わらるべきかといったことが最初は難しかったが、回を重ねるにつれて、子どもとうまくやり取りをすることができるようになった。また、企画を通して、どんな内容が楽しめるのか、どのような配慮が必要なのかといったことを考え、学ぶことができた。」

4) 課題と展望

あすなろに通う児童生徒の中には、在籍校に普段登校することが難しい場合も少なくない。また、あすなろについても、通うことができる時とそうでない時があると考えられる。そのような状況の中で、あすなろの先生方からは、「学生が来ると、子どもたちも来る」との声が聞かれており、児童生徒にとって学生達との触れ合いが楽しみの1つになっていることが推測される。

参加した学生たちからも、あすなろを訪れる回数を重ねるにつれて、「子どもたちがよく話してくれるようになった」「活動が楽しい」などの声も聞かれるようになった。実際に自分たちが企画した活動を行う場面でも、児童生徒が安心して活動に参加し、楽しめるように丁寧な声掛けを行いながら、円滑に進行している様子が見られた。あすなろボランティアは、児童生徒を支える活動であると同時に、学生たちにとってもやりがいや充実感を得られる機会となり、自分の「居場所の一つ」と感じられる場になっていることが考えられる。

今後の課題としては、授業時間や長期休暇、就職活動などとの両立の難しさが挙げられる。学生はそれぞれ限られた時間の中で活動に参加しており、ボランティアの時間を継続的に確保することが難しい場合も少なくない。今後は、複数年から、複数名の学生が参加する体制を目指すことで、参加可能な時間や人数が増えることが期待される。

あすなろに通う児童生徒にとって、ボランティアの学生との関わりが、将来の自分の姿を思い描くきっかけとなることも期待される。

(担当：春日 由美)

14. ちゃぶ台としての教職相談室の活動

1) 教職相談室について

教育学部の中に2カ所に分かれて教職相談室がある。B棟1階102室と教職総合実践センター1階105室である。いずれも、教師への憧れをもつ学生が夢を語る心温かい憩いの場である。学生が未来の扉を開き、夢への大きな一歩を踏み出せるように、相談にあたっている。また、この相談室は、山口大学卒業生や現職の教員にも開放し、♥心のふるさと♥になっている。



2) 令和7年度ちゃぶ台としての教職相談室活動概要

(1) 教職スタートアップセミナー～4月から教壇に立つ人のための事前研修～

趣旨は、4月から新規採用教員、あるいは臨時採用教員として教壇に立つ4年生、院生、そして教職をめざす2・3年生を対象に、来る日に備え、自分なりの志をもちしっかりとした第一歩を踏み出してほしいという願いから、教職スタートアップセミナーとしてプログラムを作成した。

そこで、4月から教職に就く学生にとって、直面する課題はどんなことがあるか洗い出した。今年度は次の3つを取り上げることとした。1つめは学級づくりである。2つめは、赴任前後の不安や悩みへの対応である。3つめは、同僚、担当する児童生徒、保護者、地域等との人間関係の構築である。

以下、それぞれの実践を紹介していく。

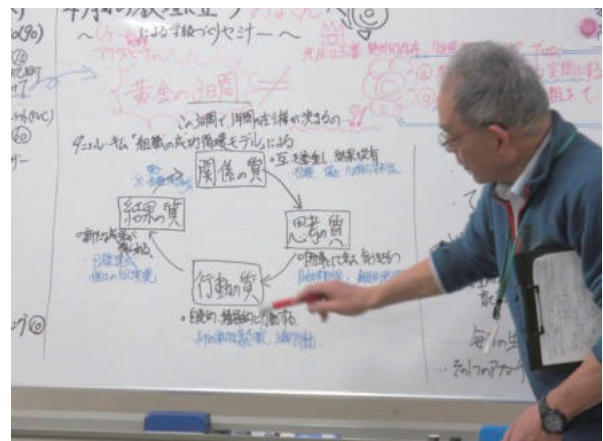
① 令和8年1月21日(水) ゲームによる学級づくりセミナー(参加学生8名)

講師

(大殿小学校) 山本 英文 先生

学級づくりがうまくいけば、授業も成立しやすくなる。AFPYという人間関係づくりのたくさんのゲームを通して、学級の仲間との絆や居場所の作り方を体験していくことでたくさんの学級づくりのノウハウを学ぶ。

ゲームによる学級づくりセミナーの様子





学生の振り返り

本日は、セミナーに参加させていただき、ありがとうございました。授業の練習はできても、学級づくりのイメージができず、1つの不安要素であったので、今回のセミナーから学ぶことができ、実際にやってみるのが楽しみになってきました。

今回のアクティビティーを自分自身が体験することで、どんな感情になるのか、どんな思いでやるのか「心」の部分まで経験することができ、本当に貴重な機会をいただけて幸せでした。

山本先生のように、私もしっかりと学んで、いろんな考えの手札を持って、教壇に立ちたいと思いました。その活動する意味もしっかりと伝えていながら、学級づくりを行っていきたいと思います。

②令和8年1月28日(水) 幼保・特支・小中高 校種別教職経験者との交流セミナー(参加学生9名)

講師

(大歳小学校) 江田 良市 先生(特別支援関係)

(勝間保育園理事長) 安邊 一教 先生(乳児幼児保育関係)

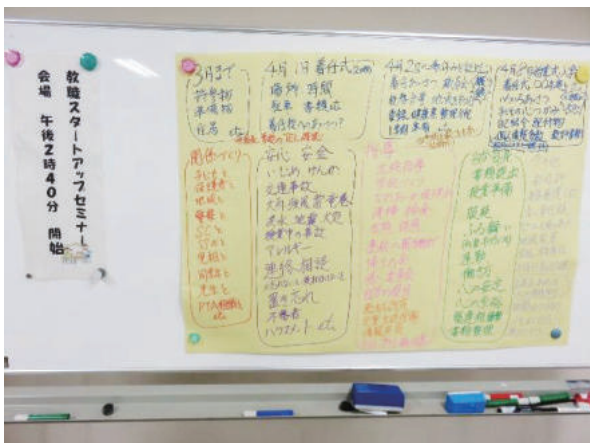
(下関市役所子育て政策課) 板倉 豊 先生(元小学校長)

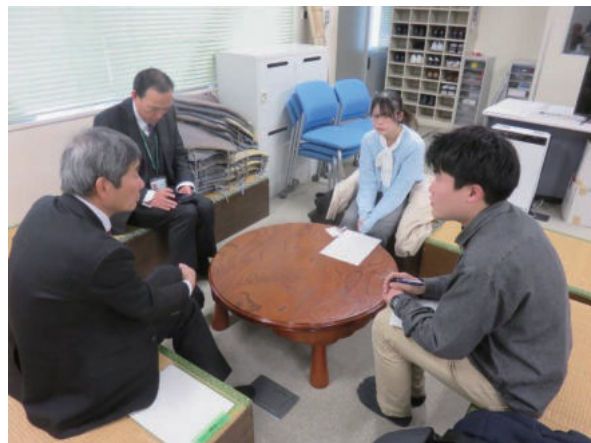
教職センター学生アドバイザー (元小学校校長) 柴田 真弓 先生

(元中学校校長) 池本 慎吾 先生 (元高校 校長) 河村 隆 先生

4月の教職スタートが近づいてくれば、多くの不安や疑問が出てくるものである。各専攻の教職経験者に尋ねて、有意義なアドバイスを受けていく。

校種別教職経験者との交流セミナーの様子





学生の振り返り

4月に向けて、漠然とした不安を持っていましたが、先生方の話を聞き、その経験や思いが、子どもの不安に寄り添うときのよい経験になると学びました。今まで、自分がどのように不安に対処してきたかを振り返り、周りにヘルプを出せる人になりたいです。

また、特別支援教育についても困ったことや迷ったことが多かったので、今回のお話を聞くことができよかったです。叱ると怒るの違いについても考え、子どものために叱るとき、自分の感情に振り回されないようにしたいです。

③令和8年2月4日(水) 良好な人間関係の構築心得セミナー (参加学生9名)

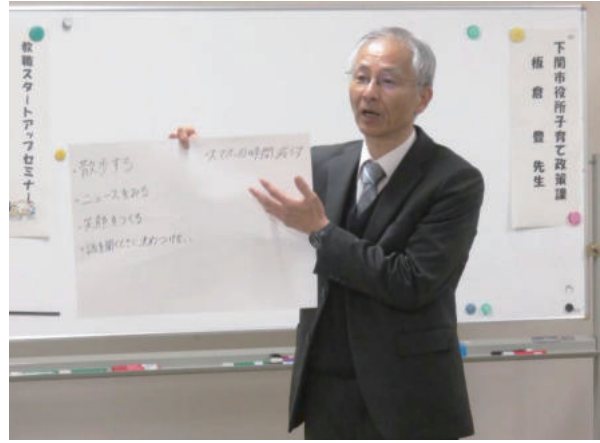
講師

(下関市役所子育て政策課) 板倉 豊 先生(元小学校長)

学校での同僚や児童生徒、保護者、ゲストティーチャー、地域の方などと良好な人間関係を構築するために、配慮すべき心得を学んでいく。

良好な人間関係の構築心得セミナーの様子





学生の振り返り

人間関係での悩みは、いくつになっても尽きないものだと思っているので、今日のような機会に良好な人間関係の構築心得セミナーを受けることができてよかったです。

自分の中で習慣化して無意識のうちに行動できるように、今日から毎日コツコツと続けて少しずつ成長できるように頑張ります。

3) 今後の課題

「教職スタートアップセミナー～4月から教壇に立つ人のための事前研修～」は、昨年度のプログラムをさらに改編した。今年度の3日間は、それぞれ有意義な内容で、教職に就く学生にとって必要不可欠なセミナーとなった。また、講師の言葉は、学生を勇気づけ、前に進むための後押しそのものであった。

だが、残念ながらなかなか参加学生が少ない。昨年度は3日間を連続して2月に実施していたが、今年度は、1月下旬から2月初旬にかけて毎週水曜日4コマ目にこのセミナーを開いた。それは、毎週水曜日の4コマ目は、大学の講義がないということからだった。それでも、参加人数が少なかったのは、このセミナーの時期が学生の試験日や卒論作成やその発表会の時期が重なっていたからであろう。来年度は、実施時期をもう一度検討して、より多くの学生が参加できるように配慮していく。

さて、我々学生アドバイザー4名は、日頃は教員採用試験対策の相談業務に当たっている。昨年度から、教員採用1次試験が5月開催になったところも多い。また各自治体が2・3年生から試験に参加できるようにしたり、試験日を昨年度よりも早く設定したりしているところもある。いずれも優秀な教員数を確保しようとするためである。それに伴い、教職相談室でも、相談業務や教採対策のための講座等も開催時期の検討や変更等を余儀なくされている。だが、学生が臨む各自治体の教員採用試験日やその試験内容の情報提供や的確な相談や手厚い支援ができるようしていくことが我々に課された責務である。しっかりと対応していく。

(担当：福永 敬、柴田 眞弓)

教員採用試験の相談に来ませんか

◎ エントリーシート、学生時代に力を注いだ体験（ガクチカ）など疑問や相談、試験に向けてのノウハウや練習など、何でも対応します。

◎ これまで、「集団討論を見てほしい」「個人面接の練習を添削してください」「動機を教える練習を添削してください」「論文を添削してください」などいろいろ対応してきていました。また、「入室のノックの回数」「試験会場に駐車場はありますか」なども対応してきました。早めに見直しを立てていくことが合格への近道です。先輩の体験レポートも紹介できます。

◎ どんなことでも楽しく解決します。もちろん、採用試験以外のことも、大丈夫。お気軽に来室してくださいね。

15. 教職概論支援

1) 活動の趣旨

「教職概論」は教育学部所属1年生全員の必須科目であり、教員養成における「教職スタート科目(教職入門科目)」として位置づけられている。教員養成カリキュラムを正しく理解し、将来の教職キャリア形成を具体的にイメージすることで、今後の学びの基盤となる基礎的な視点を獲得することを目的としている。ちやぶ台事業部では、スタッフとして授業の支援を行うとともに、講義内で「ちやぶ台プログラム」を紹介し、学外活動への参加を促している。

2) 活動概要

(1) 教職概論の目的

「教える立場」への視点転換 これまでの「教わる側」としての経験を問い直し、学校教育を「教える側」の視点から多角的に概観する姿勢を養う。

教職の意義と魅力の再発見 現職教員との対話や講話を通じ、教職の専門性や責任、子どもに関わる仕事の魅力を深く理解し、教職への情熱と使命感を醸成する。

現代的教育課題への理解 学校現場が直面しているいじめ、不登校、ICT活用といった現代的な諸課題を学び、教員に求められる資質能力について基礎的な知識を習得する。

能動的・協働的な学びの体得 グループでの討論や発表などの演習を通じ、教員として不可欠なコミュニケーション能力や、他者と協働して課題を解決する態度を身に付ける。

大学における学びの基盤形成 先輩学生の経験やカリキュラムの全体像を把握することで、4年間の学びの意義を理解し、主体的な学修計画を立てる一助とする。

教員としての自覚と行動 教育実習等の学外活動を見据え、社会規範やマナーを理解するとともに、将来の子どもの育ちを支える者としての責任ある行動を促す。

(2) 教職概論の講義計画

令和7年度の「教職概論」の講義計画は、表1に示す通りであった。

表1 教職概論の講義計画

回	日程	目 標	内 容
1	4/9 (水)	カリキュラムの中での教職概論の位置づけを知り、これからの学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ○オリエンテーション「教職概論」とは ・新入生への期待(重松副学部長) ・授業の説明(藤井先生) OPP(1枚ポートフォリオ)シート ・スタッフ紹介・アイスブレイク ○班での顔合わせ、グループワーク「先生とは何をする人?」と全体交流(1~16班) ○OPPシートによる振り返り
2	4/23 (水)	大学カリキュラムとちやぶ台プログラムについて知り、参加の意欲を持つ。情報社会の特性を知り、ボランティア活動の注意事項を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○学部カリキュラムと自主的な学びの場 ・ちやぶ台プログラムの紹介(阿濱) →チューター活動の参加を呼びかけ、希望者の募集 ・学校現場における教育学部生としてのモラル等(SNS等のモラル、ルール等)(阿濱先生) ○阿濱先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り

回	日程	目 標	内 容
3	5/7 (水)	教育の現代的課題を知り、教職についての責任や使命を自覚する。	○現代的教育課題（1） ・子どもの見方～特別支援教育の視点～（須藤先生） ・教職スタート3科目について（河村先生） ・ちゃぶ台林間学校について紹介 ○須藤先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り
4	5/14 (水)	教育の現代的課題を知り、教職についての責任や使命を自覚する。	○現代的教育課題（2） ・学校改革について（原田先生） （・高校生を対象とする教職セミナーに関する調査） ○原田先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り
5	5/28 (水)	教師としての力量形成を視野に入れた自己の学びの戦略づくり、学生生活の見通しをもつ。座談会の概要・目的を知る。	○学生ライフを描く（1） ・目指すべき教員像（生島先生） ○生島先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り ○学校体験について（河村先生） ○座談会について（藤井先生）
6	6/4 (水)	座談会の企画を通して、教職に関する疑問を話し合い、学校現場について関心を高める。	○教職ライフを描く（1） 児童生徒から教師への転換～ 教師はどう見ているか・考えているか～（藤井先生） ・質問事項の話し合い ○OPPシートによる振り返り
7 8	6/7 (土)	座談会を通して、現職教員の教育観・教師観にふれ教員に求められることは何か考える。	○教職ライフを描く（2） 現職教員の「教職観・教員の資質・能力」（座談会） ・座談会企画・運営（河村、原田、藤井、協力スタッフ） ○先生方へ御礼メッセージとOPPシートによる振り返り
9	6/11 (水)	座談会を通して考えた教育観・教職観について省察し自分自身の考えをもつ。	○教職ライフを描く（3） 座談会の総括（藤井先生） ・座談会で学んだこと（個人・ペア・班・全体交流） ・中間レポートの説明（①座談会で学んだこと、気づいたこと）、「②教師に求められる資質・能力」をまとめる） ○中間レポートを書いてOPPシートによる振り返り
10	6/14 (土)	教育の現代的課題を知り、教職についての責任や使命を自覚する。	○現代的教育課題（3） ・地域連携について（霜川先生） ○霜川先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り
11		「学校体験」の目的や内容を把握し、見通しをもつ。	○学校体験に向けて ・「学校体験」についてのガイダンス（河村先生）学校体験の書類の指導と学生同士の相互評価
12	6/25 (水)	教師としての力量形成を視野に入れた自己の学びの戦略づくり、今後の学生生活の見通しをもつ。	○学生ライフを描く（2） 私たちはどのような教職ライフを送るのか ・教員のキャリアについて（青山先生） ○青山先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り

回	日程	目 標	内 容
13	7/2 (水)	教育の現代的課題を知り、教職についての責任や使命を自覚する。これまでの学びを振り返る。	○現代的教育課題（4） ・教員としての心構え（藤井先生） ○藤井先生との質疑応答とOPPシートによる振り返り
14	7/9 (水)	最終レポートを書くことを通して、教職概論での学習を振り返る。	○最終レポートの説明（原田先生）「私の教職概論物語：今の私から、未来の教室へ」をまとめる。ペアやグループで学びを共有する。入学当初の自分②教職概論を通して得た「学び」や「気づき」③未来を見つめる。「なりたい自分」「今の自分の強みと弱み」も見つめながら、具体的にまとめる。 ○OPPシート全体の学びのプロセスを振り返る
15	7/23 (水)	総括とレポート課題を通して、教職概論での学習を振り返る。「教職キャリア形成Ⅰ」の目的や内容を把握し見通しをもつ。	○総括（藤井先生） ・最終レポートの紹介 ○教職キャリア形成Ⅰオリエンテーション ・「教職キャリア形成Ⅰ」について説明（河村先生） ○OPPシートの最終的な振り返りと今後に向けて

(3) 教職概論の特色

本授業では、学生が教職の本質を多角的に理解し、自身の将来像を具体化できるよう、以下4つの特色を持ったカリキュラムを構成している。

①多様な専門領域による多角的なアプローチ 特別支援教育、地域連携、学校改革など、異なる専門領域を持つ複数の教員が講義を担当している。これにより、学生は自身の専攻分野のみならず、現代的な教育課題を幅広い視野で捉えることが可能となっている。

②コースの枠を超えた協働的な学び 所属コースの枠を解体し「混成グループ（令和7年度は16班編成）」による学びを重視している。初回はペアトーク等のアイスブレイクを取り入れ、本質的な問い（「学校とは何か」「教師とは何をする人か」等）を語り合える場を設定した。他コースの学生との交流を通じ、異なる考え方に触れることで、教職に対する見方を多層的に深めている。

③理論と実践を往還する「現職教員との座談会」 現職教員を招いた座談会を実施している（図1）。本物との出会いは、学生が将来の教師像を具体的に描く強力な一助となる。講演会形式ではなく、本音を語り合える座談会形式とした。学生が主体的に問いを立てて質問する時間を確保し、教員と学生の双方向の対話を実現している。

④継続的な省察（リフレクション）の仕組み 振り返りの時間を重視している。そのツールとしてOPPシート（One



図1 現職教員との座談会の様子

期日	内容	本日の授業で一番大切だと考えたこととその理由	全体の学び・気づき・課題・疑問等（自由に書くことあり）
7/9 (水)	教職概論で 教員としての心 構えを学ぶオリ エンテーション （水）		
7/14 (水)	共に学ぶ仲間 先生と交流 （水）		
7/23 (水)	学歴がキャリア と自立的な 学びの場 ・キャリアプロ グラム ・情報モラル （水）		
7/27 (水)	現代の 教育課題(1) 子どもの居方 特別支援教 育の現状 （水）		
7/31 (水)	現代の 教育課題(2) 学校改革につ いて （水）		
8/5 (水)	学生タイプを 書く(1) ・目指す教師像 ・学校体験 ・教職員につ いて(1)実 （水）		

図2 学びを可視化したOPPシート（一部）

Page Portfolio：一枚ポートフォリオ)を活用し、学習の軌跡を可視化することで、学びをより確かなものへと定着させている(図2)。特に、中間・最終レポートでは、学生自身が自らの学びをOPPを元に省察することができた。

(4) 学生の振り返りの声(最終レポートより)

- ・私は教師に向いてないのではと心配だった。今はそんな自分に向き合い、教職概論などの時間を通して教師に必要な能力は何かを学び、成長するぞという気持ちに変わった。こうなれたのは授業や座談会で先生方が学び続けることの大切さを教えてくださったからだ。
- ・印象に残ったのは、レポート内容の共有だ。新たな視点が発見できた。考えが違ってても良いし、その方が面白く学べることが倍になる。私も、教員になった時に積極的に意見交流を行いたいと思った。
- ・教師は、子どもの成長を見守り支える存在であると考えていた。しかし座談会で先生の心情、失敗談、そして改善について聞くうちに、先生も子どもと共に成長して行く存在であることを学んだ。

3)まとめ

多様な専門性を持つ教員による講義と、混成グループでの対話、現職教員との座談会を通じ、理論と実践を往還する学びを実現した。自ら問いを立て、OPPシートを活用することで学生の主体的な学びを可視化できた点も成果である。この学びを核に、学生が4年間の教職キャリア形成を具体的に描けるよう学部全体の支援体制をより強固にしていきたい。

(担当：藤井 志保, 原田 拓馬, 河村 直子)

16. ちゃぶ台研修会－教育DS勉強会

1) 活動の趣旨(目的)

教育に関わる情報化に関する技術や知識の習得及び共有し、参加者の職務の情報化を促進する環境の構築を目指す。活動では、講師の教育実践を概要紹介し、実際の演習を通して技術の習得を図り、技術の習得を通して参加者の教育的活動にかかわる効力感を高め、教員の職務継続意思や教員志望意識を維持することを目指す。

2) 日時

これまでのDS勉強会の日時、テーマ、講師を表1に示す。

表1 これまでの教育DS勉強会の開催概要

	日時	テーマ	講師(所属)(敬称略)	
1	2025年 3月 8日(土)	クエリ関数	山本 貴志 (周南市立富田中学校教諭)	
2	2025年 7月12日(土)	クエリ関数	山本 貴志 (周南市立富田中学校教諭)	
3	2025年11月15日(土)	クエリ関数	山本 貴志 (周南市立富田中学校教諭)	
4	2026年 2月 7日(土)	音楽科教育におけるICT利用	田村 恵美 (防府市立右田中学校教頭)	山村 香織 (山口市立大殿中学校教諭)
5	2026年 2月28日(土)	生成AI利用	小泉 光豊 (宇部市立厚南小学校)	

3) 開催場所

山口大学教育学部

4) 活動概要

1. 第2回と第3回は、第1回に引き続きクエリ関数の利用方法に関する講義と演習を行った。講師からはGoogle Classroomを活用した教育実践と効果が紹介され、Googleスプレッドシートのクエリ関数を用いた実践事例が提示された。2. 第4回は音楽科教育におけるICT機器利用の目的と実践利用について講義と演習が行われた。防府市、山口市の音楽科教育におけるICT利用環境が紹介された。3. 第5回は生成AIの教育実践への応用について、講義と演習をとして参加者の理解を深めた。アプリケーションはGoogle GeminiとNotebookLMを用いた。

5) まとめ

教育のDS勉強会は昨年度に引き続き開催されたが、幸いにも多数の参加者を得るに至った。この事実は、単なるICT技術の習得にとどまらず、情報をいかに効果的に活用するかという点に対する潜在的な需要の高さを示唆している。とりわけ、各教科における実践事例の提示や、昨今の生成AIに対する関心の高さが強く実感された。今後は、クエリ関数のごとき専門性の高いテーマを堅持しつつ、教員や学生にとって親和性が高く、かつ実益を伴うテーマをいかに調和させていくかが肝要といえよう。最後に、勉強会参加者の皆様、広報活動に携わってくださった先生方、講師の先生方、主催の高橋雅子先生、共催・運営をしていただきましたちゃぶ台研修部に感謝いたします。(担当 沖林 洋平)



17. 教職実践研究－ちゃぶ台プログラム参加者の意識調査

1) 活動の趣旨(目的)

本プログラムは「教職実践研究」と銘打っているが、その具体的な活動内容は、ちゃぶ台プログラム参加者の意識を調査し、その意義、有効性を確認すると同時に、問題点、改善点を洗い出すことである。これは平成19年度「教職課程の課程認定後の事後評価の在り方に関する調査研究事業」の調査研究を、より継続・発展させ、ちゃぶ台プロジェクトに焦点化したものである。

2) 令和7年度の活動概要

(1) 調査方法

調査期間は令和7年12月～令和8年2月。調査は以下の2つの方法で実施した。1. 授業終了時に調査用URL（Googleフォーム）を記載した資料を配布し、Web上での回答を求めた。2. プログラム毎にQRコードを配布し、回答を求めた。

(2) 調査結果

有効回答数は、延べ学生345名、現職教員0名、大学院生(ストレートマスターを含む)0名であった。複数回答を除いた回答者の学年の内訳は大学院生0名、四年生0名、三年生157名、二年生120名、一年生0名であった。

回答者には参加したプログラムをあげてもらい、そのプログラムについて評価を求めた。プログラムごとの回答者数と満足度、成長を実感できた度合は表1, 2に示した。

プログラムの満足度を測定する項目は8項目で、5段階評価で回答を求めている。点数は「全くそう思わない」から「とてもそう思う」まで1～5点として換算した。

全体的にいずれの項目も高く評価されており、特に「このプログラムは満足のいくものだった」「このプログラムに、今後も参加していきたい」「楽しんで行うことができた」「このプログラムにかけた時間は、無駄ではなかった」という項目については高評価を受けている。

プログラムの活動を通しての成長した実感を測定する項目は18項目で、5段階評価で回答を求めている。点数は「全く成長できなかった」から「とても成長できた」まで1～5点として換算した。項目ごとの結果は表2に示した。

表1. プログラムの満足度に関する項目ごとの平均値, 中央値, 標準偏差

項目	平均値	中央値	標準偏差
1 満足のいくものだった	4.11	4	0.77
2 一人では参加しづらかった	3.06	3	1.32
3 教職を目指す者は全員参加すべきだ	3.32	3	0.94
4 今後も参加していきたい	4.06	4	0.95
5 友人を誘いたい	3.74	4	0.89
6 参加したい人だけ参加すればよい	4.14	4	0.92
7 楽しんで行うことができた	4.28	4	0.74
8 かけた時間は無駄ではなかった	4.29	4	0.8

表2. プログラムを通しての成長に関する項目ごとの平均値, 中央値, 標準偏差

	項目	平均値	中央値	標準偏差
1	子どもの気持ちに対する理解力	3.89	4	0.69
2	積極的に行動する力	4.2	4	0.64
3	多様な個性の理解	3.82	4	1.01
4	子どもの興味を引く教具を作る技術	3.35	3	1.04
5	教材についての指導技術	2.77	3	1.07
6	指導科目に関する専門知識	2.74	3	1.18
7	他者にためらいなく助けを求める等, 連携の意識	4.03	4	0.87
8	上司や同僚との付き合い方	3.91	4	0.95
9	保護者とのかかわり方	2.92	3	1.24
10	いじめ, 不登校の問題に, 積極的に対応することができる	2.12	2	1.14
11	安全や教育効果に配慮した教室の環境を整備することができる	3.77	4	1.01
12	児童の活動や表情などから心情や問題, 学習の実現状況を察知し指導することができる	3.55	4	0.98
13	学校の課題や成果を公表し, 保護者や地域住民の理解や承認を得る	2.43	2	1.2
14	保護者や地域住民が, 日常的に学校を訪れる雰囲気を作る	2.74	3	1.22
15	学校支援に必要な人材の発掘を進める	2.66	3	1.14
16	学校教育目標にキャリア教育を位置づける	2.57	3	1.27
17	職場体験活動等を実施し, 事前・事後指導を計画的に行う	2.26	2	1.22
18	学校評価等でキャリア教育の評価を行い, 評価結果に基づき, 指導等の改善を図っている	2.54	3	1.28

いずれの項目もおおむね高く評価されており, これは従来の傾向と同様のものである。

表3. プログラム参加者数 (複数回答)

	プログラム名	参加者数
1	学校チュータ・特別支援教育支援	36
2	学力向上支援員派遣事業	3
3	保育ボランティア	21
4	理科ボランティア・理科アシスタント	6
5	体育実技ボランティア	8
7	ちゃぶ台林間学校	18
8	ちゃぶ台次世代コーホート	3
11	ちゃぶ台研修会	4
12	まなプロ	32
13	教育フェス	52
14	ちゃぶ台プログラムに参加していない	162
	総 計	345

3) 今後の課題

昨年度から, プログラム参加者と不参加者数についても調査を行っている。表3に延べ参加者数を示した。345名のうち, 162名が不参加である。これは延べ回答数の47%を占める。複数回答を除いた場合, より不参加者数の割合が高くなる。プログラムの効果を不参加者に周知, 広報することが求められる。まなプロや教育フェスへの参加者が多いことはこれらプログラムが学生の需要に対応したものであることを示唆している。

末筆ではあるが, 調査にご協力いただいたプロジェクト担当者, ご回答いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

(担当 沖林 洋平)

Ⅳ 協働型研修のハブとしてのちゃぶ台ルーム

1. ちゃぶ台ルーム

「ちゃぶ台ルーム」は、学生たちの自発的実践を総合的に支援する教育システムを支える機能を持ち、教職をめざす学生たちが教育課題について学べる場、集い高め合える場として提供されています。平日は開放されて様々なプログラムの活動準備や省察活動で利用されています。また、ちゃぶ台プログラムのイベントでは長期休暇中を含めて土日も使用されます。

そして、小学校や中学校で採用されている各教科の教科書、附属学校園の研究集録や全国各地の先進的実践事例集等も備えられ、一人一人の学習・研修をサポートする環境も整っています。

「ちゃぶ台ルーム」は、教育実践を多様な視点から振り返る省察の場であり、日常的に開放された空間でもあります。ネットワークや電源などはもちろん、可動式ホワイトボードや大型ディスプレイなどが整備され、学生の主体的な学びをサポートする環境が整っています。

ちゃぶ台ルーム紹介

① ちゃぶ台ルーム(ちゃぶ庵)エリア

ちゃぶ台は、研修・活動内容に応じて自由な配置が可能です。カメラ、プロジェクタ、レコーダ、プレイヤー、電子黒板等各種音響・映像機器も整備されています。

② 遠隔ちゃぶ台

遠隔ちゃぶ用テレビ会議システムで、附属学校や学部教室等と繋がっています。離れた場所と結んでの振り返り、意見交換、討論や研修会のライブ映像等の視聴が可能です。

③ 電子版ちゃぶ台(eちゃぶ)エリア

時間的・空間的制約を超えた意見交換、討論、学びのルーツとして機能しています。電子版ちゃぶ台「eちゃぶ」の配信による各種プログラム報告、情報提供、体験事例(成功・失敗)の共有、掲示板・Q&Aによる個別支援の充実や研修会等のコンテンツ学習を展開しています。

④ 教科書・資料エリア

県内学校(小・中・高・特)で使用されている各社の教科書や研修資料が揃っています。教育実習前には学習指導案作成に向けた猛勉強姿が見られます。

2. オンラインちゃぶ台

各ちゃぶ台プログラムに参加する学生は、「ちゃぶ台ルーム」に集い情報共有や情報発信をしています。その集合時間や準備物などの案内はSNSなどオンラインでも行われています。また、ここ数年はGoogleアカウントを利用して、Google ClassroomやGoogleチャットで連絡を取り合うプログラムもあります。

今年度からは、活動を社会に広く発信したりするために教育学部ホームページにて報告書を掲載することになりました。



ICTサポーターのGoogle Classroom



学部ホームページ上のバナー

あ と が き

生成AIが浸透し、教育のあり方が激変するなか、教師に求められる役割もまた変化しています。そのような時代にあっても、常に学び続ける姿勢を持つ教職者の育成に向け、ちゃぶ台プログラムは進化を続けています。

私たちが目指すのは、学生が現場での触れ合いを通じて教職の本質的な喜びを実感し、次代の学校教育を担う人材として羽ばたいていく未来です。地域や学校現場の皆様と連携し、学生たちが輝ける場を創出するため、これからも挑戦を止めることはありません。

今年度、多大なるご支援・ご協力をいただいた皆様には感謝の念に堪えません。誠にありがとうございました。

なお、20周年を機に、情報発信のあり方もデジタル時代に即した形にして報告書をWeb公開（PDF）へと切り替えました。ぜひ、忌憚のないご意見をいただけますと幸いです。

山口大学教育学部「ちゃぶ台方式教職研修部」

中田 充、阿濱 茂樹、岡村 吉永、鷹岡 亮、
川崎 徳子、沖林 洋平、藤上 真弓



令和7年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書

発行 令和8年3月

山口大学教育学部「ちゃぶ台方式」教職研修部

山口県山口市大字吉田1677-1

TEL 083-933-5300 (代表)

印刷 (有)いづみプリンティング 山口市旭通り2-6-47

